

茨城県教育財団文化財調査報告第104集

常北町道105号線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

小坂宮方遺跡

平成7年9月

茨城県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第104集

常北町道105号線道路改良工事 地内埋蔵文化財調査報告書

お さか みや かた 遺 跡
小 坂 宮 方

平成7年9月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

常北町道105号線道路の改良工事は、過疎地域活性化特別措置法に基づき、過疎地域である桂村とその周辺地域の相互連絡の強化を目的に平成3年度から事業に着手されています。

この事業は、茨城県が過疎地域の対象となる町村に協力して、活性化を講じようとする措置の事業であり、また過疎地域と周辺地域を結ぶ道路についても、併せて代行整備を行い、日常生活活動の基礎的な道路網として系統的、計画的に整備するものであります。その道路改良工事予定地内に小坂宮方遺跡は所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成6年9月から平成6年10月までの2か月にわたる発掘調査を実施いたしました。

本書は、小坂宮方遺跡の調査成果を収録したものであります。今回の調査により、当地域の縄文時代早期の土器様相や平安時代の集落跡の様相を把握することができ、良好な研究資料を収録することができました。本書が、郷土の歴史の理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県からいただいた多大な御協力に対し心から感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、常北町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成7年9月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋 本 昌

例 言

- 1 本書は、平成6年度に茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施した東茨城郡常北町大字小坂字大同寺1,043番地ほかに所在する小坂宮方遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 小坂宮方遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～平成7年3月
	橋 本 昌	平成7年4月～
副 理 事 長	小 林 秀 文	平成6年4月～
	中 島 弘 光	平成7年4月～
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～平成7年3月
	齋 藤 紀 彦	平成7年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫 平成4年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫 平成7年4月～ (平成6年4月～平成7年3月係長)
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔 平成6年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明 平成5年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎 平成7年4月～ (平成5年4月～平成7年3月課長代理)
	課 長 代 理	大 高 春 夫 平成7年4月～ (平成6年4月～平成7年3月係長)
	主 任	小 池 孝 平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作 平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重 平成5年4月～
	調 査 第 四 班 長	小 泉 光 正 平成6年度
	主 任 調 査 員	萩 野 谷 悟 平成6年9月～平成6年10月調査
	主 任 調 査 員	池 田 晃 一 平成6年9月～平成6年10月調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男 平成7年4月～
	主 任 調 査 員	檜 村 宣 行 平成7年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

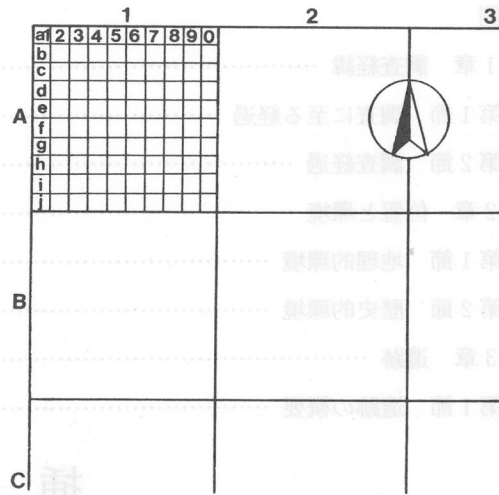
ふりがな	じょうほくちょうどうひゃくごごうせん かいりょうこうじちない まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	常北町道105号線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	小坂宮方遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第104集						
著者名	樫村 宣行						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行年月日	西暦 1995 (平成7) 年9月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おさかみやかた いせき 小坂宮方遺跡	いばらきけんひがしいばらま 茨城県東茨城 ぐんじょうほくまち おおあざ 郡常北町大字 おさかみやかた いせき 小坂宮方遺跡 1043番地ほか	08306 17	36度 28分 16秒	140度 20分 40秒	19940901 } 19941031	969m ²	常北町道105号線改良工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小坂宮方遺跡	生活跡 遺物包含層	縄文時代 (早期)	炉穴3基 陥し穴1基 土坑2基	スクレイパー 縄文式土器, 石器	遺物包含層から縄文時代早・前期の良好資料が出土している。		
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡3軒 柵列2か所	土師器, 須恵器			
		不明	土坑4基 井戸2基				

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、X軸(南北)+52,520m, Y軸(東西)+45,600mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に東西、南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定し、さらに、大調査区を東西、南北に各々10等分して、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、北から南へ「A」、「B」、「C」…、西から東へ「1」、「2」、「3」…とし、「A1」区、「B2」区と呼称した。小調査区も同様に北から南へ「a」、「b」、「c」…「j」、西から東へ「1」、「2」、「3」…「0」と小文字を付し、位置を表示する場合は大調査区と合わせて、A1b₁区、A2b₂区のように呼称した。

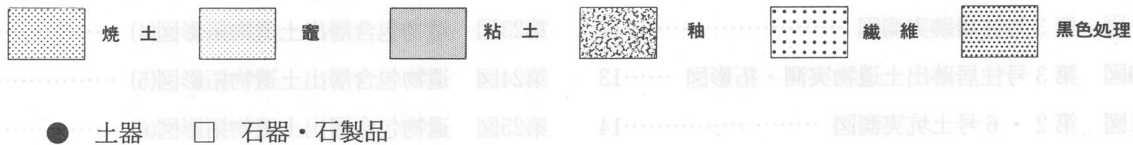


調査区呼称方法概念図

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、以下のとおりである。

- ・遺構 住居跡…S1, 柵列…SA, 土坑…SK, 炉穴…FP, 井戸…SE, 陥し穴…TP, ピット…P
- ・遺物 土器…P, 石器・石製品…Q
- ・土層 攪乱…K

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、以下の通りである。



4 土層観察における色相、含有物の量の判定については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構、遺物実測図の作成方法と掲載方法については、以下のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1, 住居跡, 土坑, 及び炉穴等は縮尺60分の1にした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり, それらについては, 個々に $S = 1 / \bigcirc$ と表示した。
- (3) 土器の計測値のAは口径, Bは器高, Cは底径, Dは高台径, Eは高台高を示した。また, (/) は現存値を, [] は推定値を示した。
- (4) 遺物観察表の備考欄は, 土器の残存率や実測(P)番号, 出土位置及びその他必要と思われる事項を記載した。

目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	7
1 竪穴住居跡	7
2 土坑	14
3 井戸	16
4 柵列	17
5 陥し穴	18
6 炉穴	19
7 遺構外出土遺物	21
第4節 まとめ	32

挿図目次

第1図 小坂宮方遺跡周辺遺跡位置図	4
第2図 小坂宮方遺跡調査地形図	5
第3図 小坂宮方遺跡全体図	6
第4図 基本土層図	7
第5図 第1号住居跡実測図	8
第6図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図	9
第7図 第2号住居跡実測図	10
第8図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図	11
第9図 第3号住居跡実測図	12
第10図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図	13
第11図 第2・6号土坑実測図	14
第12図 第2・6号土坑出土遺物実測・拓影図	15
第13図 第1・2号井戸実測図	17
第14図 第1・2号柵列実測図	18
第15図 第1号陥し穴実測図	18
第16図 第1号陥し穴出土遺物実測・拓影図	19
第17図 第1A・1B・2号炉穴実測図	19
第18図 第1A・1B・2号炉穴出土遺物実測・拓影図	21
第19図 遺物包含層実測図	22
第20図 遺物包含層出土遺物実測図(1)	23
第21図 遺物包含層出土遺物実測図(2)	24
第22図 遺物包含層出土遺物実測・拓影図(3)	25
第23図 遺物包含層出土遺物拓影図(4)	26
第24図 遺物包含層出土遺物拓影図(5)	27
第25図 遺物包含層出土遺物拓影図(6)	28
第26図 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)	30
第27図 遺構外出土遺物拓影図(2)	31

表目次

表1 小坂宮方遺跡周辺遺跡一覧表	3
表2 小坂宮方遺跡住居跡一覧表	14
表3 小坂宮方遺跡土坑一覧表	16

写真図版目次

PL1 遺跡遠景, 遺跡全景	PL4 第1・2号住居跡出土遺物, 遺構外出土遺物
PL2 第1・2・3号住居跡	PL5 出土土器(1)
PL3 第2・6号土坑, 第1・2号井戸, 第2号炉穴, 第2号炉穴遺物出土状況, 第1・2号柵列, 第1号陥し穴	PL6 出土土器(2)
	PL7 出土土器(3)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

常北町道105号線道路改良工事は、過疎地域活性化特別措置法に基づき、過疎地域である桂村とその周辺地域の相互連絡の強化を目的に行われるもので、茨城県は平成3年度からこの事業に着手している。

工事に先立ち、平成5年3月2日に茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、町道105号線改良工事地内の現地踏査及び試掘調査を実施した。その結果、平成6年3月、道路改良工事地内に小坂宮方遺跡が所在することを茨城県に回答した。平成6年8月17日、茨城県教育委員会は、茨城県と文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取り扱いについて協議した。協議の結果、平成6年8月19日、記録保存の処置を講ずることとし、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、平成6年度に小坂宮方遺跡の調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

小坂宮方遺跡の発掘調査は、平成6年9月1日から平成6年10月31日までの2か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を旬ごとに記述する。

9月上旬 調査のための諸準備を開始した。

中旬 試掘調査を開始した。その結果、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構を確認し、縄文式土器片や土師器片、須恵器片等の遺物が出土した。

下旬 試掘の結果を踏まえ、重機による表土除去を行った。

10月上旬 遺構確認作業により、竪穴住居跡や柵列、土坑等を確認した。

中旬 12日から竪穴住居跡や柵列の調査を開始した。

下旬 25日には遺構の調査をほぼ完了し、遺物包含層の調査に取り掛かり、31日には現地調査を完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

小坂宮方遺跡は、茨城県東茨城郡常北町大字小坂字大同寺1,043番地ほかに所在している。

常北町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、北は東茨城郡桂村、東は那珂川をはさんで那珂郡那珂町、南は水戸市及び笠間市、西は西茨城郡七会村に接している。

常北町の地形は、西から東に丘陵性山地、台地、沖積低地に大別される。西部の丘陵性山地は、八溝山地の南の鶏足山塊の東縁部にあたり、標高200m程度の低山が連なる。鶏足山塊は、主に砂岩、頁岩の互層からなり、一部にチャートや石灰岩を挟んでいる。また、丘陵性山地周辺部には凝灰岩、砂岩、泥岩等からなる地層

が分布しており、台地の基盤岩となっている。常北町の台地は、那珂西台地あるいは石塚台地と呼ばれる洪積台地であり、市街地の大部分がここに形成されている。台地は、標高40～50m程度で低地との比高は約20mあり、急崖に囲まれている。町の東を南に流れる那珂川と那珂川の支流群の東に流れる藤井川、西田川等が、台地を開析し沖積低地を形成している。低地は主に水田に利用されている。

当遺跡は、常北町の中央からやや北寄りに位置している。常北町の西部から北部にかけては丘陵性山地が開析し、そこを那珂川の支流である西田川が開析して狭い低地を形成しており、この低地に西側から張り出した丘陵性山地の中腹に立地している。水田との比高差は約10mである。調査前の現況は、畑地であった。

参考文献

- ・ 常北町史編纂委員会 『常北町史』 1988年3月
- ・ 蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1977年8月

第2節 歴史的環境

小坂宮方遺跡付近は、西田川によって開析された低地と丘陵性山地からなっており、原始・古代から人々が生活していたものと思われる。しかし、このような地形での遺跡の有無の確認は難しく、微高地を除いて、ほとんど確認されていない。周辺の遺跡についても発掘調査例が少なく、その詳細は明らかではないが、以下、『茨城県遺跡地図』の中で報告されているこの地域の遺跡について時代を追って概観してみたい。

旧石器時代の遺跡は、主に常北町の北部に位置する^{はるその}春園遺跡、^{かたやま}片山遺跡、^{にほんまつ}二本松遺跡、^{むかいほら}向原遺跡及び^{かつみざわ}勝見沢遺跡〈1〉が挙げられる。いずれも石器が採集されているが、その時期や性格は不明である。

縄文時代の遺跡は、周辺の遺跡の中でも数が最も多く、山間部から台地の縁辺部まで広く分布している。早期の遺跡は本跡を含め、^{なかのだ}仲野田遺跡〈2〉、^{やすど}安渡遺跡〈3〉、^{なかづま}中妻遺跡、^{なにかさい}那珂西遺跡及び片山遺跡と6か所の遺跡が確認されている。しかし、そこからは撚糸文系土器や沈線文系土器が表面採集できるものの、その量は少なく、遺跡の性格等ははっきりしたことはわかっていない。前期になると片山遺跡と仲野田遺跡だけしか確認されていない。このように早期に比べ遺跡数が少なくなるのは、縄文海進に伴い、当時の人々が山間部から平野部に生活の基盤を移していることと考えられる。中期は^{せきね}中妻遺跡や^{うしろかわ}関根遺跡、^{うしろかわ}安渡遺跡、^{うしろかわ}後側遺跡及び片山遺跡とその数は増加し、規模も大きくなる。この現象は全国的な傾向で、自然環境との関係が考えられている。しかし、後期になると^{とのうち}外之内遺跡、^{てんじん}天神遺跡及び^{ましいほんごう}増井本郷遺跡の3遺跡になり、数、規模とも減少傾向が見られる。さらに、晩期になると片山遺跡のみとなる。このように、縄文時代の人々は自然環境の変化の中で生業形態を変化させ、うまく自然の中に融合していたことが分かる。

弥生時代になるとさらに遺跡数は少なくなり、常北町内では、片山遺跡のほか^{かざはやま}風隼前遺跡〈4〉で後期の遺物が採集されている程度である。この現象は稲作の伝播という食生の変化により、山地の多い当地域では沖積地の自然堤防上でしか栽培ができず、遺跡立地に制約がなされ、おのずと遺跡数も減少するものと思われる。

古墳時代の前・中期になっても常北町内の遺跡は、弥生時代と同様に数が少なく、^{かざはやま}風隼前遺跡と^{まし}上入野遺跡の2か所で、当時の土器が確認されている。後期になると本格的な集落形成が始まり、遺跡数は増加する。^{まし}上入野遺跡は平成6年に調査が行われ、^い竪穴住居跡が確認されている。また、^{かざはやま}風隼前遺跡からは多量の後期の土器とともに滑石製の勾玉や白玉などの石製模造品が出土している。また、それに伴い集落の長の墓として、^{まし}増井古墳、^{かみあおやま}上青山古墳群〈5〉、^{ながみね}長峰古墳群、^{いしつか}石塚古墳群及び^い春園古墳群〈6〉等の古墳や群集墳も造られるよ

うになる。

奈良・平安時代になると遺跡数はさらに増加し、中妻遺跡、^{ほっこめ}北米遺跡、那珂西遺跡及び増井遺跡等常北町内だけでも36か所もの遺跡が確認されている。特に、上入野遺跡と青木遺跡、後側遺跡、前側遺跡の発掘調査では多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認されている。遺跡数の増加は開墾技術や鉄製品の普及等によって、山林の開墾が可能になったことや、人口の増加によって山間部まで生活の場を求めなくてはならない状況になったことを意味しているものと思われる。

平安時代末から中世には、この地域は常陸大掾氏、那珂氏、佐竹氏の勢力下にあり、各種の抗争の舞台となった。そのため、各氏の一族や臣下の武士たちの城館が各所に造られている。常北町内でも多くの城館跡が確認されている。その中でも石塚城跡や県指定史跡の那珂西城は、現在でも堀や土塁の跡が残っており、当時の威容を留めている。また、上入野台地西端部には小松寺があり、境内には平重盛のものと思われる墓〈7〉がある。

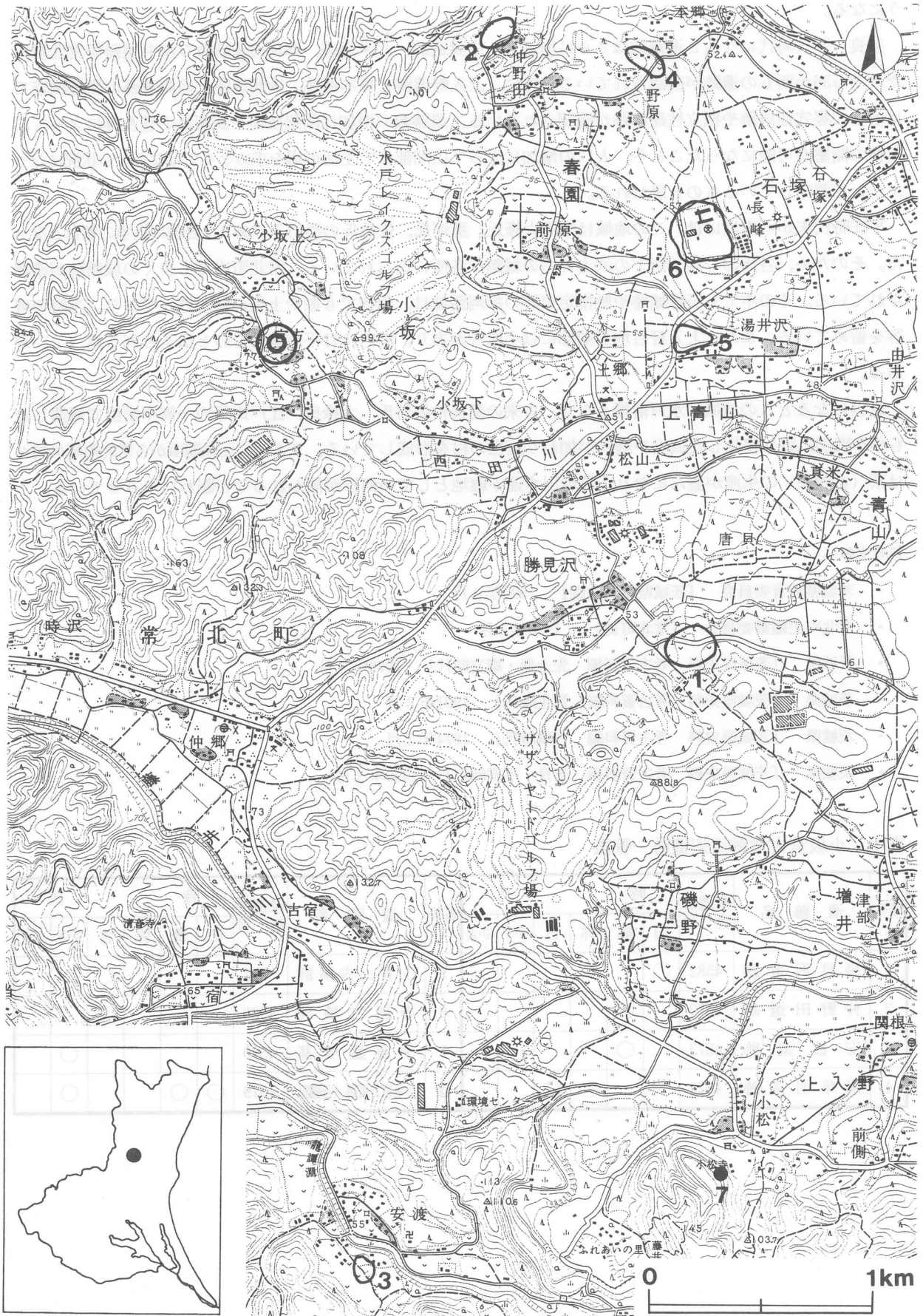
近世になるとこの地域は水戸藩領となり、古来の農民に佐竹氏、大掾氏、江戸氏等の一族や家臣で帰農したものや戦国以降に移住した武士や農民が加わり近世の村を形成している。さらに、元禄期頃から常北町域の村々は茶（古内茶）の生産が盛んになり、那珂川水運中継地としての河岸が置かれるなど賑わいをみせている。

参考文献

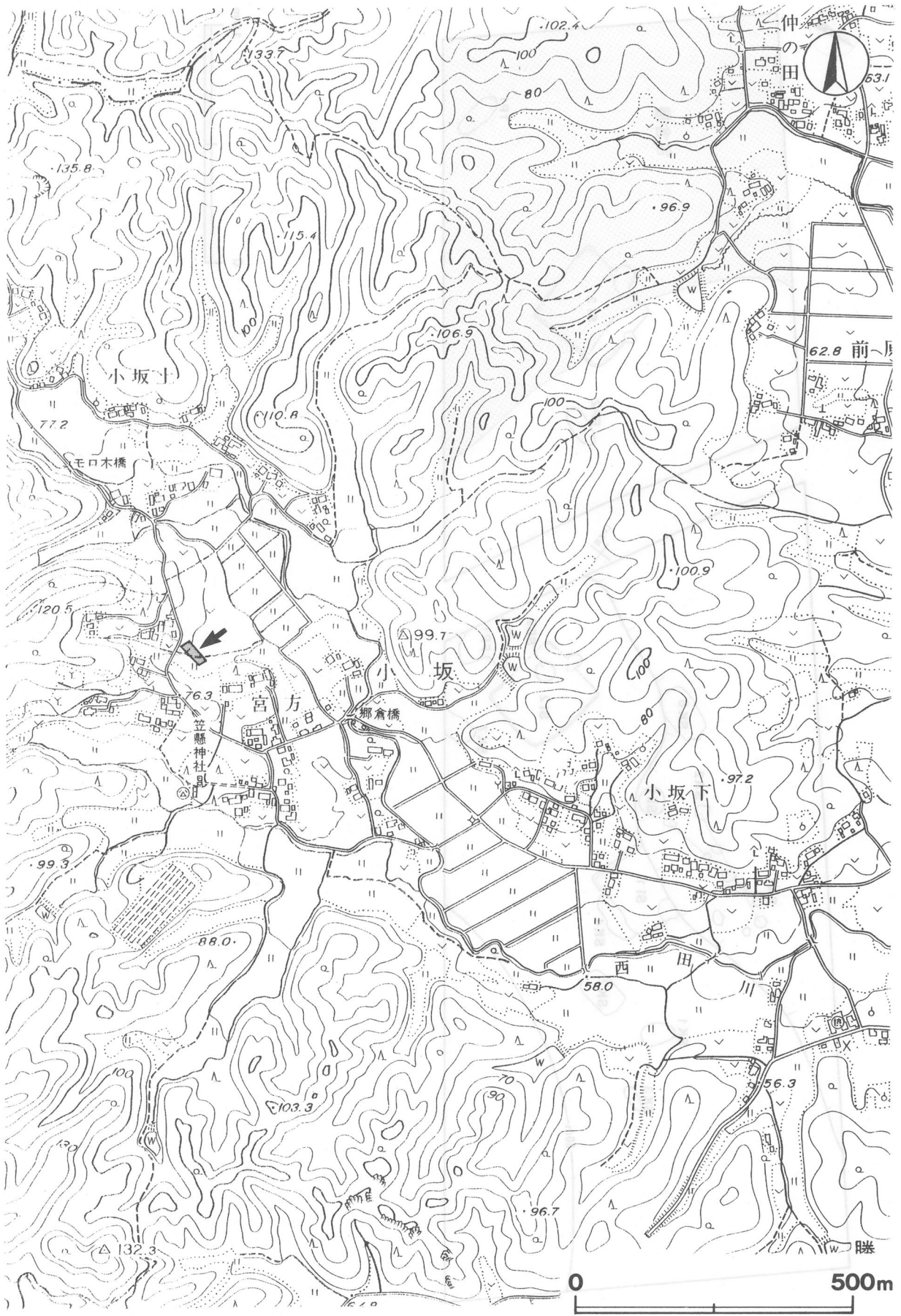
- ・ 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- ・ 常北町史編纂委員会 『常北町史』 1988年3月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年2月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 1995年3月

表1 小坂宮方遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時 代						番号	遺跡名	県遺跡番号	時 代					
			旧	縄	弥	古	奈平	中近				旧	縄	弥	古	奈平	中近
1	勝見沢遺跡	4582	○						5	上青山古墳群	291				○		
2	仲野田遺跡	4572		○					6	春園古墳群	4580				○		
3	安渡遺跡	4573		○					7	平重盛墳墓	4570					○	
4	風隼前遺跡	4574			○	○			◎	小坂宮方遺跡(当遺跡)	4579	○	○				○

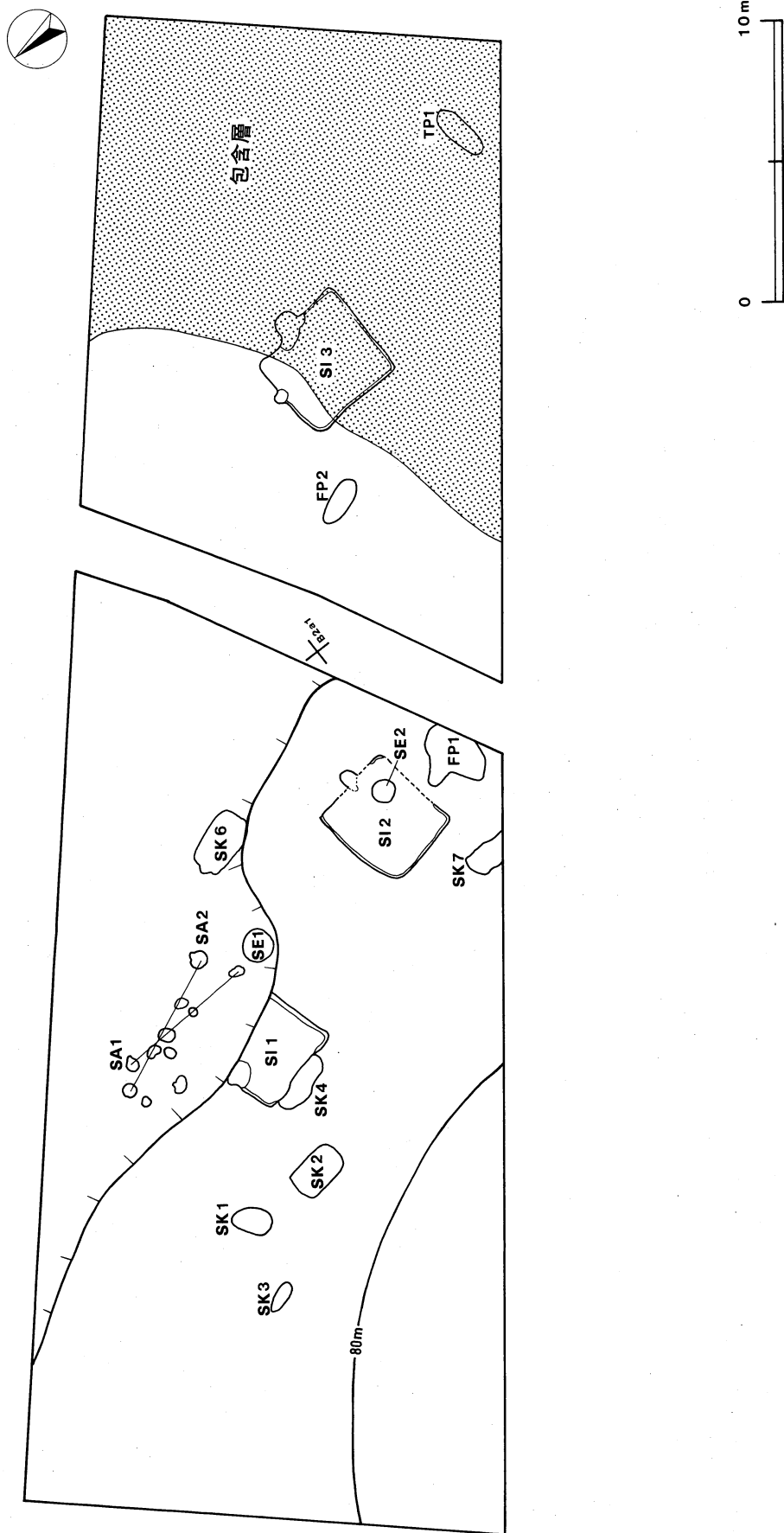


第1図 小坂宮方遺跡周辺遺跡位置図



第2図 小坂宮方遺跡調査地形図

図村全被断式宮对小 図も第



第3図 小坂宮方遺跡全体図

第3章 遺跡

第1節 遺跡の概要

小坂宮方遺跡は、東茨城郡常北町の北寄りに位置し、那珂川の支流の西田川によって開析された低地に向かって西側から張り出している尾根の中腹（標高79m）に所在している。調査区面積は969㎡であり、現況は畑地である。

今回の調査によって、調査区の中央部に縄文時代早期の炉穴2基と平安時代の住居跡3軒を、その他、遺物包含層1か所、陥し穴1基、柵列2か所、井戸2基、土坑6基を確認した。以上のことから、当遺跡は縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に4箱出土した。遺物の大部分は、縄文時代早期の土器片や平安時代の土師器・須恵器片で、住居跡や包含層を中心に出土している。

第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第4図）。

第1層は、10cm前後の厚さで、明黄褐色をしたソフトローム層である。

第2層は、20cm前後の厚さで、黄褐色をしたハードローム層である。

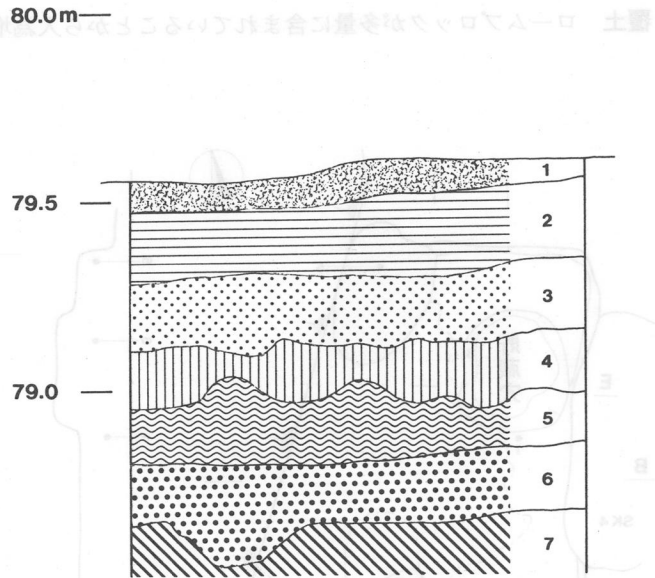
第3層は、20cm前後の厚さで、明黄褐色をしたハードローム層である。

第4層は、5～18cm程の厚さで、パミス粒子を中量含む鹿沼パミスへの漸移層である。

第5層は、10～25cm程の厚さの鹿沼パミス層である。

第6層は、黒褐色粒子を中量含む暗オリーブ褐色をしている。

第7層は、黒褐色粒子を少量含むオリーブ褐色をしている。住居跡等の遺構は、第1層上面で確認した。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当遺跡の住居跡は平安時代のもので、調査区の中央部を中心に3軒確認した。以下、確認された住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡 (第5図)

位置 調査区の中央部, A1h₈区。

重複関係 本跡の西壁中央部は第4号土坑に切られている。

規模と平面形 長軸3.5m, 短軸(2.4)mで, 住居跡の東部は削平されており, 全容は不明である。

主軸方向 N-18°-W

壁 壁高は6~10cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 南コーナー壁下で, 部分的に確認している。幅10cm, 深さ4cmで, 断面形は「U」状をしている。

床 平坦で, 中央部を中心に良く踏み固められて硬い。

ピット 1か所。P1は長径50cm, 短径40cmの不整楕円形で, 深さ20cmの出入り口施設に伴うものである。

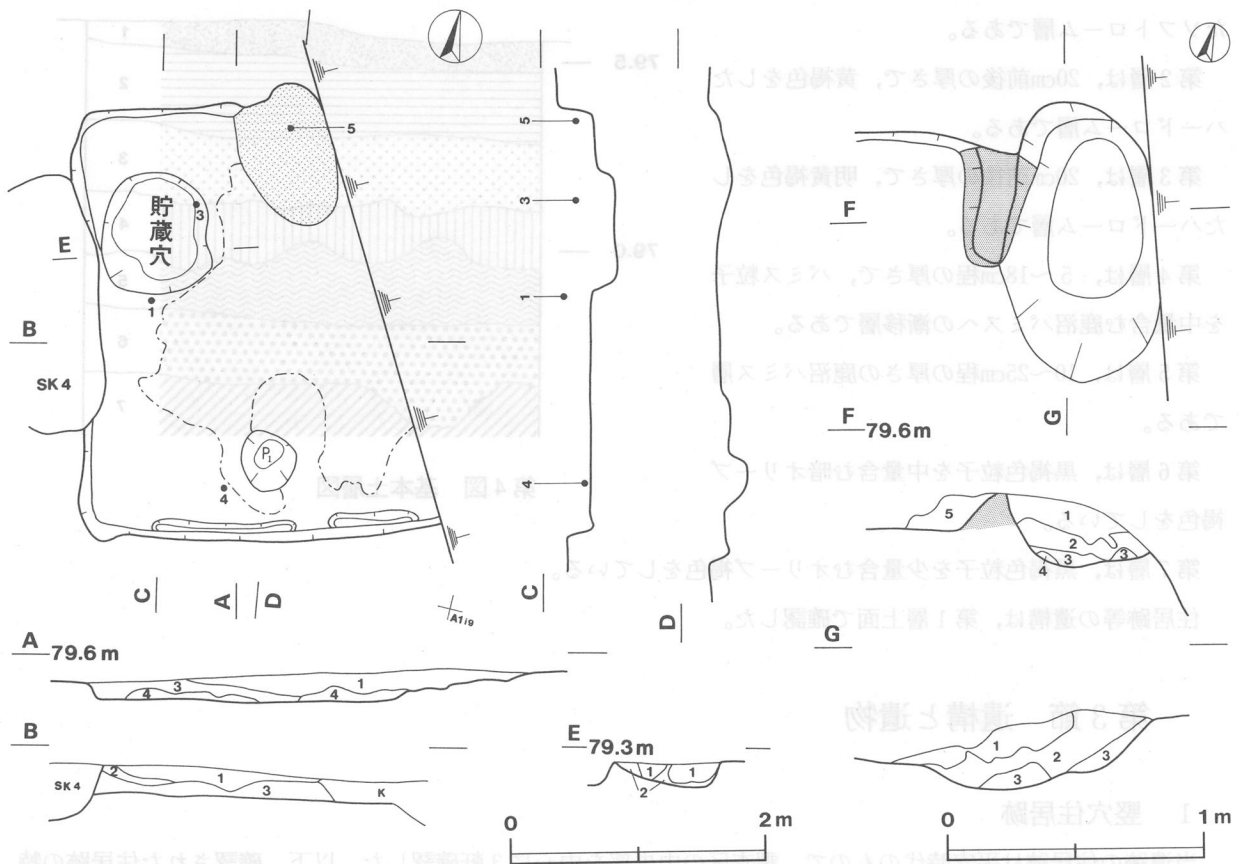
貯蔵穴 北西部で確認している。長径100cm, 短径80cmの楕円形で, 深さ18cm程の皿状をしている。

竈 北壁に, 砂質粘土で構築している。規模は長さ(110)cm, 幅(74)cmで, 東部が削平されており, 全容は不明である。左袖部は床面上に砂質粘土を貼り付けて袖としており, 内面は赤変が激しい。火床部は長径104cm, 短径(62)cmの楕円形と思われ, 皿状をしている。煙道部は削平されており, 不明である。

竈土層解説

1 褐色土	焼土ブロック・焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子少量, 炭化物極少量	3 褐色土	ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土ブロック・焼土粒子中量
2 暗赤褐色土	焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子多量, ロームブロック中量, 炭化物少量	4 明黄褐色土	ロームブロック少量
		5 黄褐色土	ローム粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック少量

覆土 ロームブロックが多量に含まれていることから人為堆積と思われる。



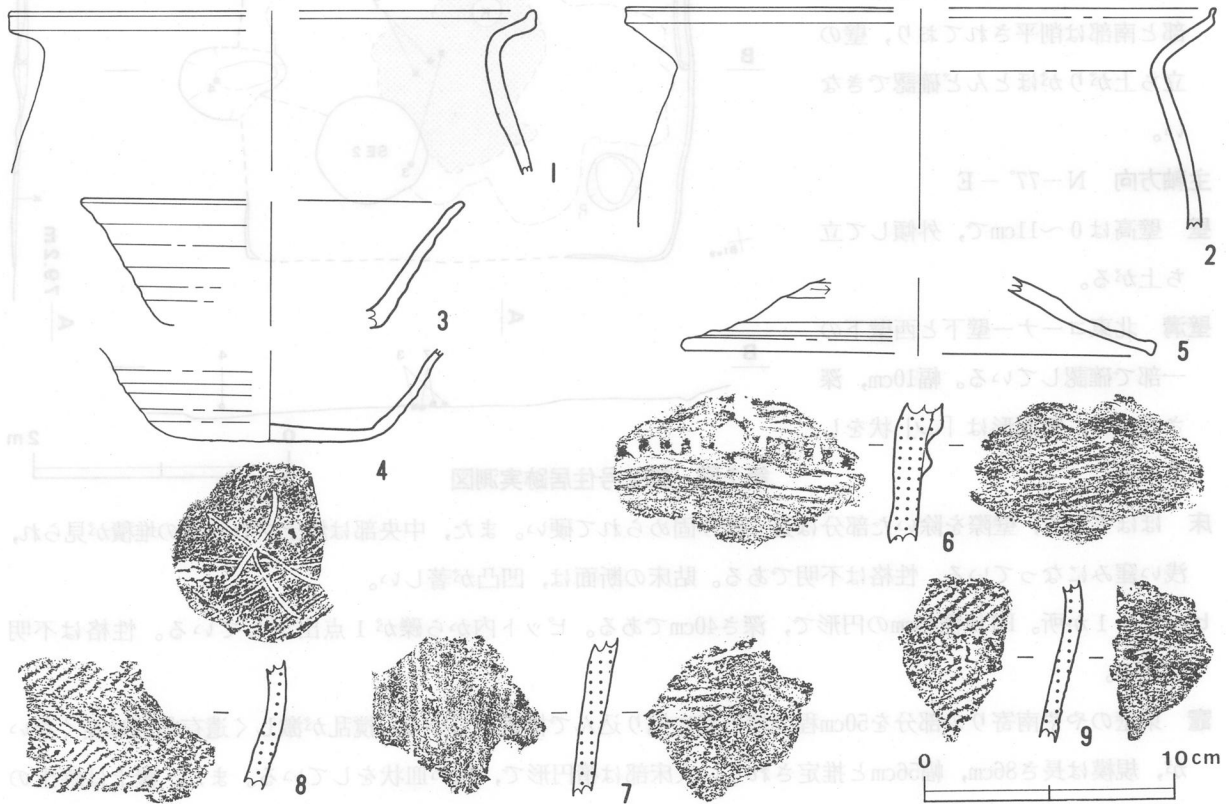
第5図 第1号住居跡実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|--|--------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量, 焼土ブロック・
焼土粒子少量, 炭化物極少量 | 3 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量, 炭化物少量,
焼土ブロック極少量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土ブロッ
ク・炭化粒子極少量 | 4 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量, 炭化物少量,
焼土ブロック極少量 |

遺物 中央部や竈付近を中心に少量の土師器片や須恵器片が出土している。その他、混入と思われる縄文式土器片（早・前期）や剥片（チャート, 黒曜石, 石英）が出土している。1の土師器甕片は西部の覆土上層から, 2の甕片（常陸形甕）と5の須恵器蓋片は竈内から, 3の坏片は西部の覆土下層から, 4の坏片は南壁際の床面直上から出土している。

所見 出土須恵器の胎土に針状鉱物の含有が見られることから水戸市木葉下窯跡産のものと思われる。また, 本跡は須恵器の形状等から, 9世紀前葉のものと思われる。



第6図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	甕 土師器	A [20.9] B (6.4)	体部・口縁部片。体部は内彎し, 口縁部は「く」の字状に開き, 口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部・体部横ナデ。	長石粒・石英粒多量, スコリア 暗褐色 普通	P 1, 15% 二次火熱痕 常総形甕
2	甕 土師器	A [23.5] B (8.8)	体部・口縁部片。口縁部は「く」の字状に開き, 上位に稜を持ち, 端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部・体部横ナデ。	長石粒・石英粒多量 褐色 普通	P 2, 15% 二次火熱痕 常総形甕
3	坏 須恵器	A [15.3] B 5.0 C [8.4]	体部・口縁部片。体部は直線的に外傾し, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。	長石, 針状鉱物 赤灰色 普通	P 3, 25% 木葉下窯産
4	坏 須恵器	B (3.5) C 7.4	底部・体部片。平底。体部はわずかに内彎しながら外傾する。	体部横ナデ。底部切り離し後, ナデ調整。	長石 暗灰色 普通	P 4, 45% 底部ヘラ記号「大」
5	蓋 須恵器	A [18.8] B (2.9)	天井部・口縁部片。天井部はドーム状をしている。口縁部は外彎気味にのび, 端部はわずかにつまみ出されている。	天井部回転ヘラ削り。口縁部横ナデ。	小石, 石英粒 褐灰色 普通	P 5, 10%

6と7は縄文時代早期後葉の茅山下層式土器の胴部片で、6は器面に条痕を施した上に刺突文のある横方向の隆帯が施されている。8と9は前期前葉の関山式土器の胴部片で、羽状縄文が施されている。

第2号住居跡 (第7図)

位置 調査区の中央部, A1j₉区。

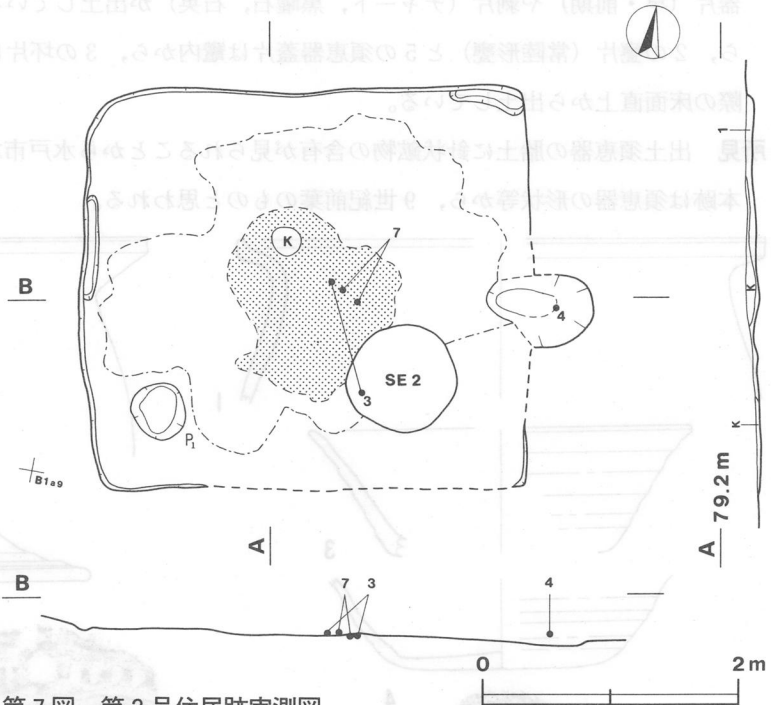
重複関係 本跡の南東部は第2号井戸に切られている。

規模と平面形 長軸3.5m, 短軸3.2mの方形と思われるが, 住居跡の東部と南部は削平されており, 壁の立ち上がりがほとんど確認できない。

主軸方向 N-77°-E

壁 壁高は0~11cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 北東コーナー壁下と西壁下の一部で確認している。幅10cm, 深さ5cmで, 断面形は「U」状をしている。



第7図 第2号住居跡実測図

床 ほぼ平坦で, 壁際を除いた部分は良く踏み固められて硬い。また, 中央部は焼土ブロックの堆積が見られ, 浅い窪みになっている。性格は不明である。貼床の断面は, 凹凸が著しい。

ピット 1か所。P1は径45cmの円形で, 深さ40cmである。ピット内から礫が1点出土している。性格は不明である。

竈 東壁のやや南寄りの部分を50cm程半楕円状に掘り込んで構築している。攪乱が激しく遺存状況は良くないが, 規模は長さ86cm, 幅56cmと推定される。火床部は楕円形で, 浅い皿状をしている。また, 覆土は焼土の含有が多いものの火床面は赤変硬化していない。煙道部は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

覆土 1層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子極少量

遺物 全体の覆土下層や床面直上を中心に少量の土師器片や須恵器片が出土している。その他, 縄文式土器片(早期)や剥片(チャート)が出土している。1と2, 4の土師器坏片, 5の高台付坏片は覆土下層から, 3の坏片と7の甕片は中央部の床面直上から, 6の甕片(常陸形甕)と8の灰釉陶器片は貼床覆土から出土している。

所見 灰釉陶器が黒笹90号窯式~折戸53号窯式のものであることや土師器坏の形状等から, 本跡は9世紀末葉から10世紀前葉のものと思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第8図 1	坏 土師器	A [14.3] B 4.5 C 7.6	底部~口縁部片。平底。体部は内彎しながら外傾し, 口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部外面横ナデ後, 体部下端手持ちヘラ削り調整。口縁部・体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。	長石, 小石, スコリア 外乳白色, 内黒色 普通	P 6, 45% 内面黒色処理



第8図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	坏 土師器	A [12.8] B 3.5 C [6.7]	底部～口縁部片。平底。体部は内彎気味に外傾し、口縁部は直線的に開く。器肉は全体的に厚い。	口縁部・体部外面横ナデ。内面ナデ。	小石 外黄褐色、内黒色 普通	P 7, 10% 内面黒色処理
3	坏 土師器	A [16.7] B (4.8)	体部・口縁部片。体部は内彎気味に外傾し、口縁部は直線的に開く。	口縁部・体部外面横ナデ。内面ヘラ磨き。	長石粒 外黒褐色、内黒色 普通	P 8, 20% 内面黒色処理
4	坏 土師器	A [14.2] B 3.5 C [8.4]	底部～口縁部片。平底。体部は内彎しながら外傾し、口縁部は直線的に開く。	口縁部・体部外面横ナデ後、体部下位回転ヘラ削り調整。口縁部・体部内面ヘラ磨き。底部回転ヘラ切り。	白色鉱物 黄褐色 普通	P 9, 10%
5	高台付坏 土師器	B (5.4) D [10.4] E 1.3	高台部・体部片。高台は直線的に開く。体部は内彎しながら外傾する。	体部横ナデ。	小石 黄褐色 普通	P10, 15%
6	甕 土師器	A [21.5] B (9.5)	体部・口縁部片。体部は内彎する。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。体部外面ヘラ削り。	黒雲母、石英粒、針状鉱物 暗褐色 普通	P11, 5% 常陸形甕
7	小形甕 土師器	A [17.1] B (4.6)	口縁部片。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。	石英粒、長石粒、スコリア 黄褐色 普通	P12, 5% 常陸形甕
8	広口瓶 灰釉陶器	B (1.7)	頸部片。頸部は外反する。	頸部横ナデ。	黒色斑点 灰白色 良好	P13, 2% 黒笹90号窯～折戸53号窯期

9は縄文時代早期中葉の田戸上層式土器の口縁部片で、沈線が施されている。10は早期後葉の野島式土器の胴部片で、細隆線文が施されている。11～13は早期後葉の茅山下層式土器片である。

第3号住居跡 (第9図)

位置 調査区の南東部, B2b₂区。

規模と平面形 一辺3.7mの方形をしている。

主軸方向 N-83°-W

壁 壁高は10cm前後で, 外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で, 竈前面を中心に良く踏み固められて硬い。

竈 北壁に第1竈, 東壁に第2竈を確認した。竈の遺存状況や付設位置等から見て, 第1竈を廃棄後に第2竈が構築されたものと思われる。第1竈は, 北壁中央からやや東寄りの部分を壁外に30cm程掘り込んで構築している。規模は長さ56cm, 幅49cmである。袖部と天井部は全て取り払われている。火床部は楕円形をしており, 浅い皿状をしている。煙道部は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。第2竈は, 東壁中央部を壁外に50cm程掘り込み, 砂質粘土で構築している。規模は長さ115cm, 幅80cmである。袖部は, 床面上に砂質粘土を貼り付けて構築している。火床部は卵形で, 皿状をしている。煙道部は火床面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- 1 暗褐色土 粘土粒子多量, 焼土ブロック少量

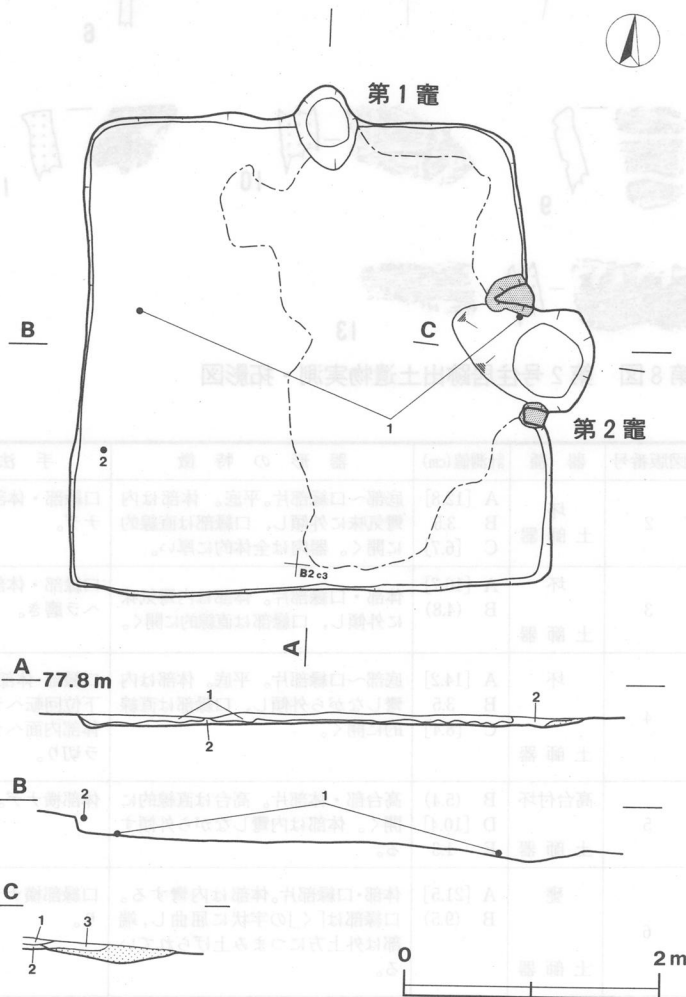
覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色土 ローム粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 2 暗褐色土 焼土粒子中量, ローム粒子・ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 3 褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量, ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化物少量

遺物 第2竈付近を中心に少量の土師器片や極少量の須恵器片, 鉄滓が出土している。その他, 覆土中から剥片(赤メノウ, チャート)や縄文式土器片(早・前期)が出土している。1の土師器甕片(常陸形甕)は竈内から, 2の須恵器壺は西壁際の覆土上層から出土している。

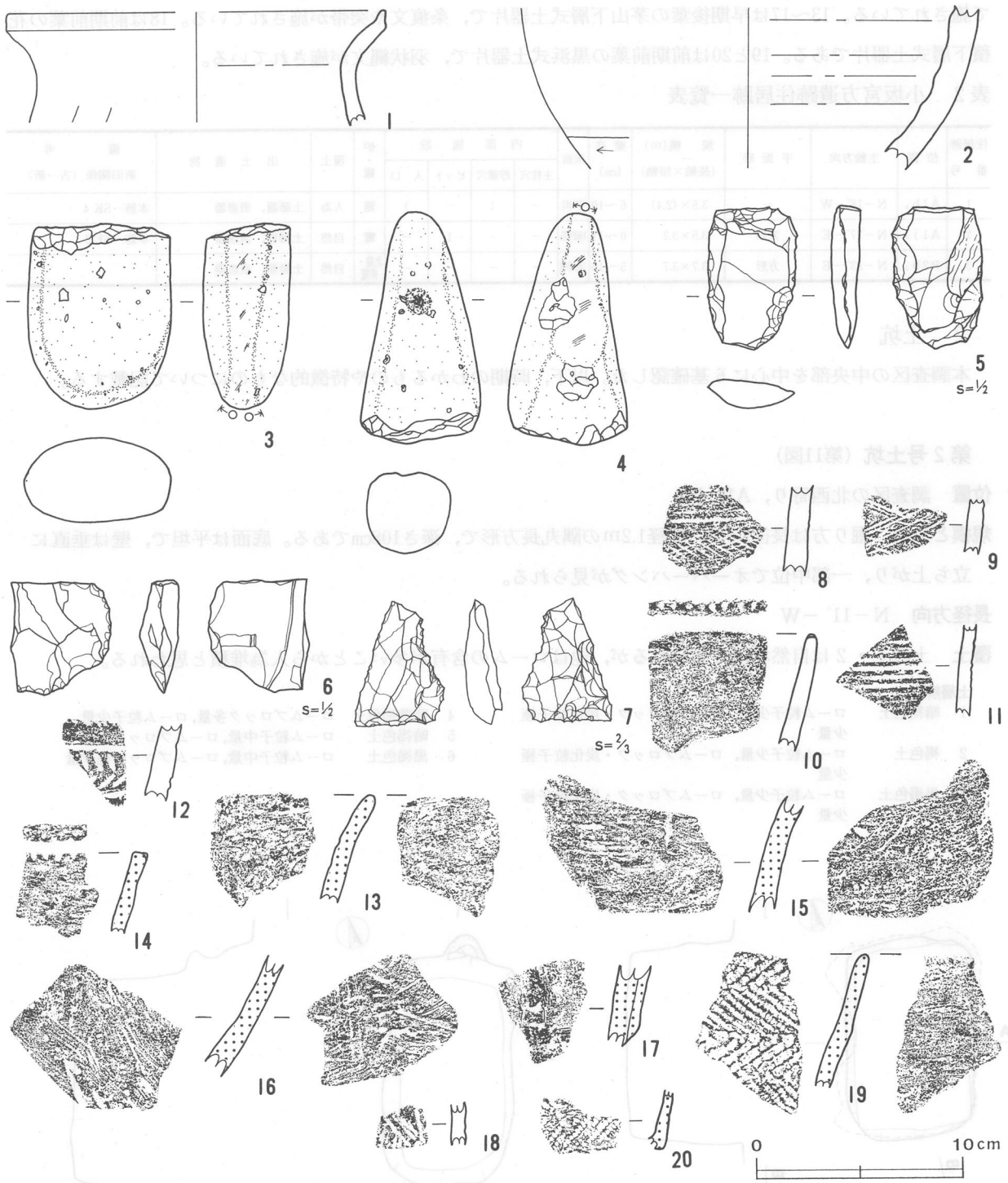
所見 出土遺物が少なく明確なことは分らないが, 本跡は竈付設置位置や土師器片等から9世紀後葉のものと思われる。



第9図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	甕 土師器	A [18.3] B (5.4)	口縁部片。口縁部は「く」の字状に屈曲して, 上位に稜を持ち, 端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。	黒雲母, 長石 乳白色 普通	P15, 5% 二次火熱痕 常陸形甕
2	壺 須恵器	B (7.8)	体部片。体部は内彎する。	体部横ナデ後, 下位回転ヘラ削り調整。	砂粒, 針状鉱物 灰色 良好	P16, 5%



第10図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第10図 3	磨石	9.0	7.0	4.3	442.3	安山岩	西壁際床面直上	Q1
4	磨石	11.3	5.8	3.9	372.2	安山岩	1区 覆土	Q2
5	スクレイパー	4.6	2.9	1.0	14.1	チャート	3区 覆土	Q3
6	スクレイパー	3.7	3.2	1.2	18.1	チャート	3区 覆土	Q4
7	石鏃	3.1	2.2	0.8	4.1	チャート	3区 覆土	Q5, 未製品

8と9は縄文時代早期中葉の三戸式土器の胴部片で、横走る沈線が施されている。10～12は早期中葉の田戸上層式土器片で、10の口唇部片は口唇部に刻み目が施されている。12の胴部片は沈線と貝殻腹縁文を沿わせ

て施されている。13～17は早期後葉の茅山下層式土器片で、条痕文や突帯が施されている。18は前期前葉の花積下層式土器片である。19と20は前期前葉の黒浜式土器片で、羽状縄文が施されている。

表2 小坂宮方遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉・ 竈	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古-新)
							主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	A1h _a	N-18°-W	-	3.5×(2.4)	6~10	平坦	-	1	-	1	竈	人為	土師器, 須恵器	本跡-SK 4
2	A1j _a	N-77°-E	方形	3.5×3.2	0~11	段階型	-	-	1	-	竈	自然	土師器, 須恵器	本跡-SE 2
3	B2b ₂	N-83°-E	方形	3.7×3.7	5~10	段階型	-	-	-	-	北竈・ 東竈	自然	土師器, 須恵器	

2 土坑

本調査区の中央部を中心に6基確認した。以下、時期のわかるものや特徴的なものについて記載する。

第2号土坑 (第11図)

位置 調査区の北西寄り, A1h₇区。

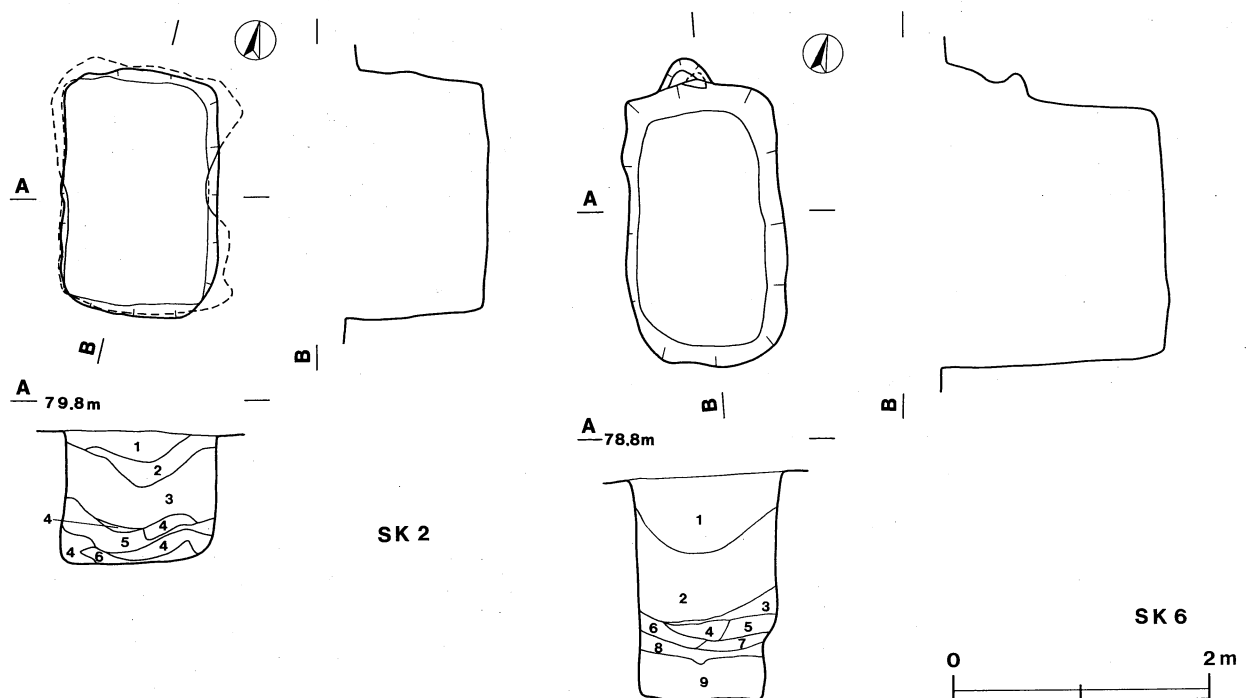
規模と形状 掘り方は長径2.0m, 短径1.2mの隅丸長方形で、深さ108cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、一部中位でオーバーハングが見られる。

長径方向 N-11°-W

覆土 土層1・2は自然堆積と思われるが、他はロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子少量, ロームブロック・炭化粒子極少量 | 4 明黄褐色土 | ロームブロック多量, ローム粒子少量 |
| 2 褐色土 | ローム粒子少量, ロームブロック・炭化粒子極少量 | 5 暗褐色土 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子少量, ロームブロック・炭化粒子極少量 | 6 黒褐色土 | ローム粒子中量, ロームブロック極少量 |



第11図 第2・6号土坑実測図

遺物 覆土中から縄文式土器片（早・前期）少量と16の凹石，17の磨製石斧（グリーンタフ）が出土している。
 その他，剥片（チャート・石英）が極少量出土している。
 所見 本跡は出土遺物から縄文時代前期前葉の土坑の可能性がある。

第6号土坑（第11図）

位置 調査区の中央部，Ali₀区。

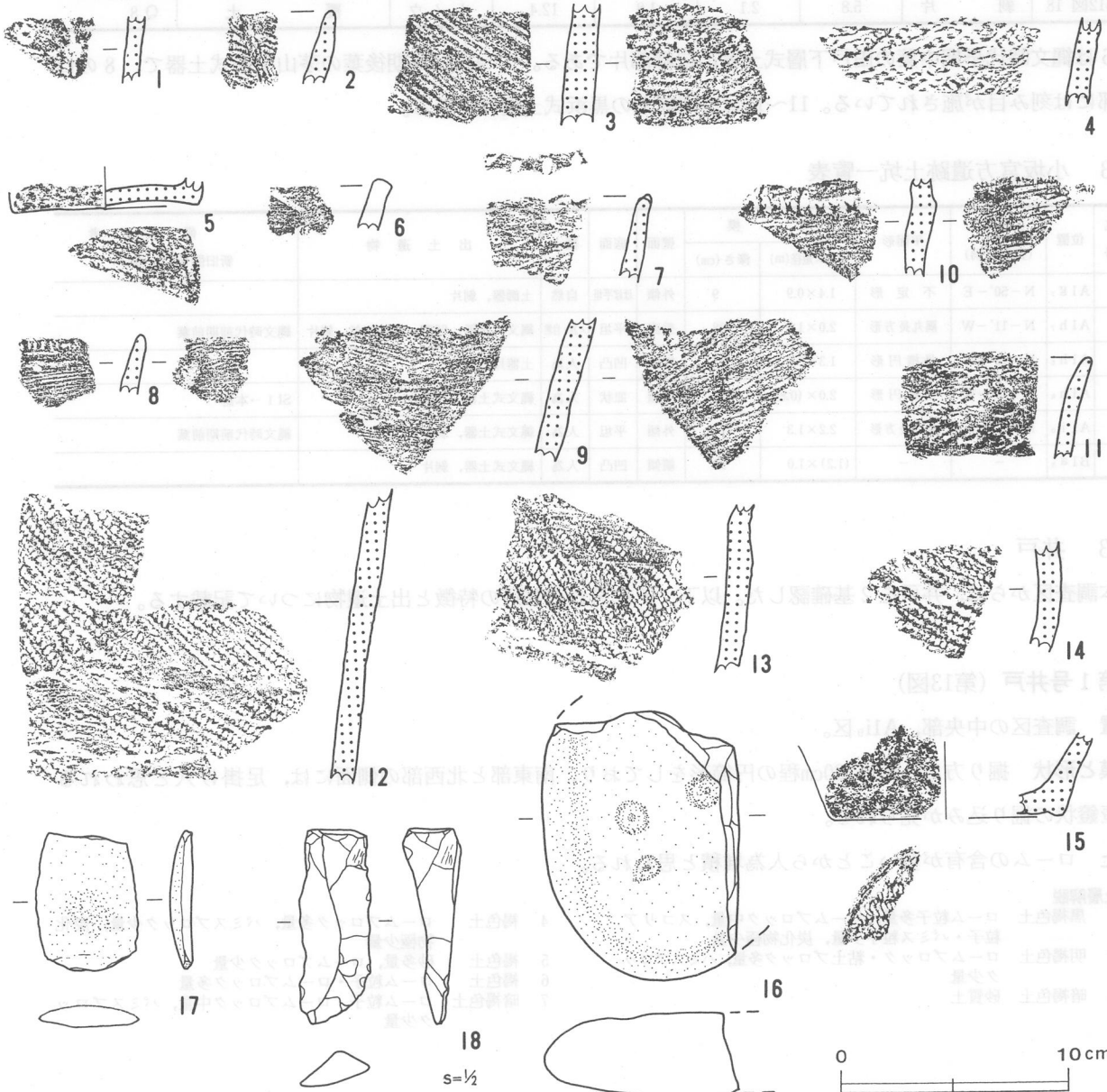
規模と形状 掘り方は長径2.2m，短径1.3mの隅丸長方形で，深さ174cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-17°-W

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色土	ローム粒子多量，ロームブロック中量，スコリア粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子・炭化物極少量	4 褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量
2 暗褐色土	ローム粒子多量，ロームブロック中量，スコリア粒子・炭化物少量	5 褐色土	ローム粒子中量，ロームブロック少量
3 褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量	6 褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量
		7 褐色土	ローム粒子・ロームブロック中量
		8 明黄褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量
		9 褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量



第12図 第2・6号土坑出土遺物実測・拓影図

遺物 覆土中から縄文式土器片（早・前期）が中量と剥片（チャート）が極少量出土している。

所見 本跡は出土遺物から縄文時代前期前葉のものと思われる。

第2号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第12図 16	凹石	(11.8)	(8.6)	3.6	(500.3)	安山岩	覆土	Q 6
17	磨製石斧	(6.1)	(4.5)	(1.1)	(35.1)	凝灰岩	覆土	Q 7

1は縄文時代早期後葉の鶴ヶ島台式土器の胴部片で、円形竹管による刺突文が施されている。2と3は早期後葉の茅山下層式土器片で、条痕文が施されている。4は前期前葉の黒浜式土器片である。

第6号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第12図 18	剥片	5.8	2.1	1.8	12.4	メノウ	覆土	Q 8

6は縄文時代早期中葉の田戸下層式土器の口縁部片である。7～10は早期後葉の茅山下層式土器で、8の口唇部には刻み目が施されている。11～15は前期前葉の黒浜式土器片である。

表3 小坂宮方遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	Alg ₇	N-50°-E	不定形	1.4×0.9	9	外傾	ほぼ平坦	自然	土器片, 剥片	
2	Alh ₇	N-11°-W	隅丸長方形	2.0×1.2	108	垂直	平坦	人為・自然	縄文式土器, 凹石, 磨製石斧, 剥片	縄文時代前期前葉
3	Alh ₆	N-19°-W	長楕円形	1.3×0.5	24	緩傾	凹凸	人為	土器片, 剥片	
4	Alh ₈	N-19°-W	長楕円形	2.0×(0.8)	50	外傾	皿状	人為	縄文式土器, 破礫片	SI1→本跡
6	Ali ₉	N-17°-W	隅丸長方形	2.2×1.3	174	外傾	平坦	人為	縄文式土器, 剥片	縄文時代前期前葉
7	Bla ₈	-	-	(1.2)×1.0	26	緩傾	凹凸	人為	縄文式土器, 剥片	

3 井戸

本調査区からは、井戸を2基確認した。以下、それぞれの井戸の特徴と出土遺物について記載する。

第1号井戸（第13図）

位置 調査区の中央部、Ali₉区。

規模と形状 掘り方は、直径120cm程の円筒形をしており、南東部と北西部の側面には、足掛け穴と思われる壺鑑状の掘り込みが見られる。

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色土	ローム粒子多量, ロームブロック中量, スコリア粒子・パミス粒子少量, 炭化物極少量	4 褐色土	ロームブロック多量, パミスブロック少量, 炭化物極少量
2 明褐色土	ロームブロック・粘土ブロック多量, パミスブロック少量	5 褐色土	砂多量, ロームブロック少量
3 暗褐色土	砂質土	6 褐色土	ローム粒子・ロームブロック多量
		7 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック中量, パミスブロック少量

遺物 覆土中から土師器の細片と剥片（チャート）が出土している。

所見 本跡は遺物が出土しているものの極少量であり、時期は限定できない。

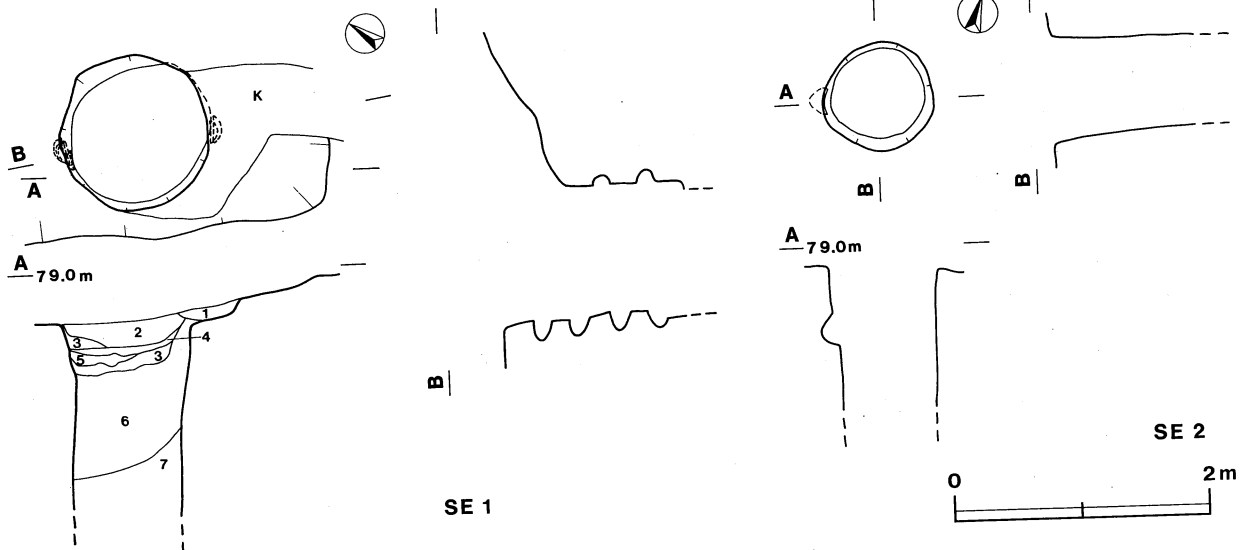
第2号井戸（第13図）

位置 調査区の中央部，A1j₉区。

重複関係 本跡は，第2号住居跡を切っている。

規模と形状 掘り方は，直径90cm程の円筒形をしており，西部の側面には，足掛け穴と思われる壺鐙状の掘り込みが見られる。

所見 本跡は遺物が出土していないことから，時期不明である。



第13図 第1・2号井戸実測図

4 柵列

本調査区からは，柵列を2か所確認した。それぞれの柵列の特徴について記載する。

第1号柵列（第14図）

位置 調査区の中央部，A1g₉区。

重複関係 第2号柵列と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模 直線上に4か所のピットが確認され，柱間の寸法は1.3～2.0mで，北から南に5m程延びている。ピットは，径30～55cmの不整円形で，深さ25～47cmである。

方向 N-4°-W

遺物 P₃から土師器の細片が出土している。

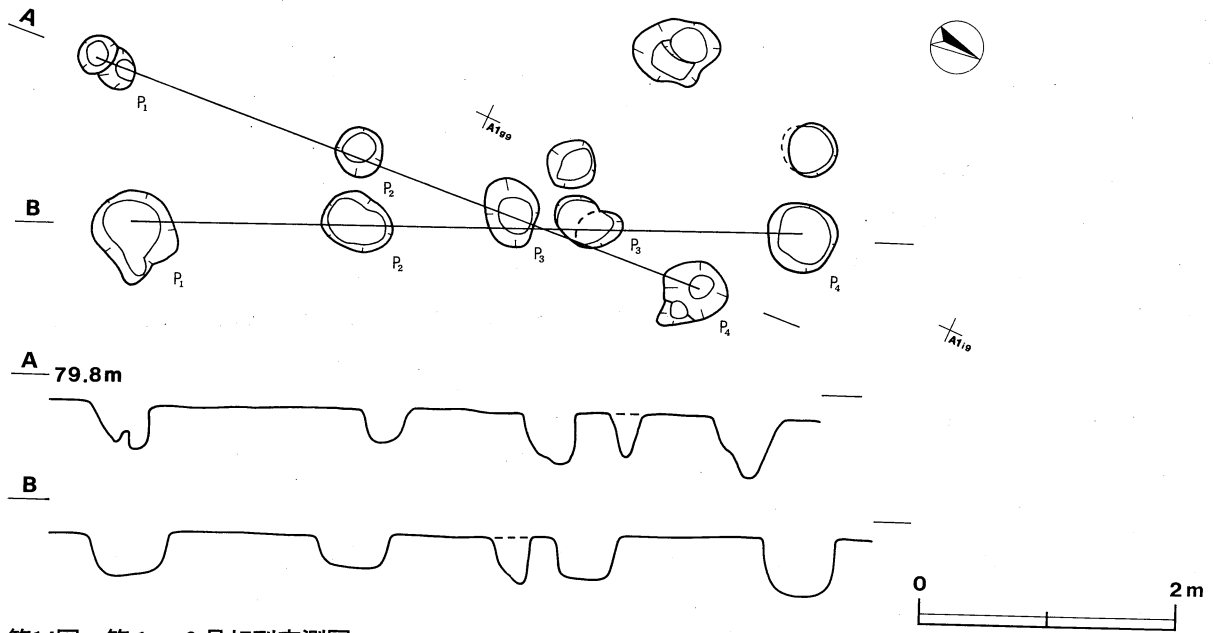
所見 本跡は，出土遺物から平安時代のものと思われる。

第2号柵列（第14図）

位置 第1号住居跡に沿って，A1g₉区を中心に確認した。

重複関係 第1号柵列と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模 直線上に4か所のピットが確認され，柱間の寸法は1.7m程で，北西から南東に5.3m程延びている。ピット



第14図 第1・2号柵列実測図

トは、径50~60cmの円形もしくは楕円形で、深さ30~46cmである。

方向 N-23°-W

所見 遺物が出土していないため判明はできないが、本跡は位置や方向から見て第1号住居跡に伴うものと思われる。

5 陥し穴

第1号陥し穴 (第15図)

位置 調査区の南東部、B2d₃区。

規模と形状 掘り方は、長径2.0m、短径0.7mの長楕円形をしており、底面はわずかな凹凸が見られ、逆茂木痕と思われる4か所の小ピットが確認されている。壁は、外傾して立ち上がる。

主軸方向 N-80°-E

覆土 1層の堆積であるが、谷部に位置しており、一気に埋もれたものと思われることから自然堆積と思われる。

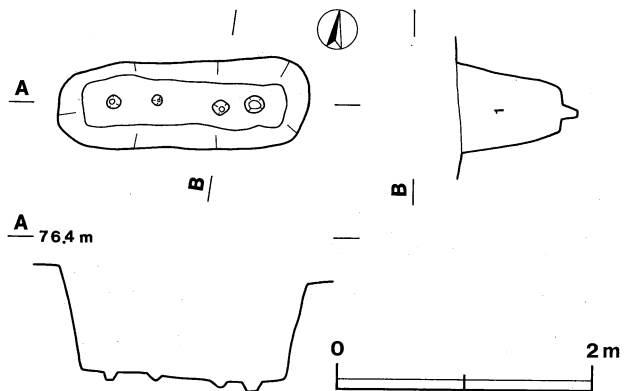
土層解説

1 黒色土 スコリア粒子・焼土粒子・焼土ブロック極少量

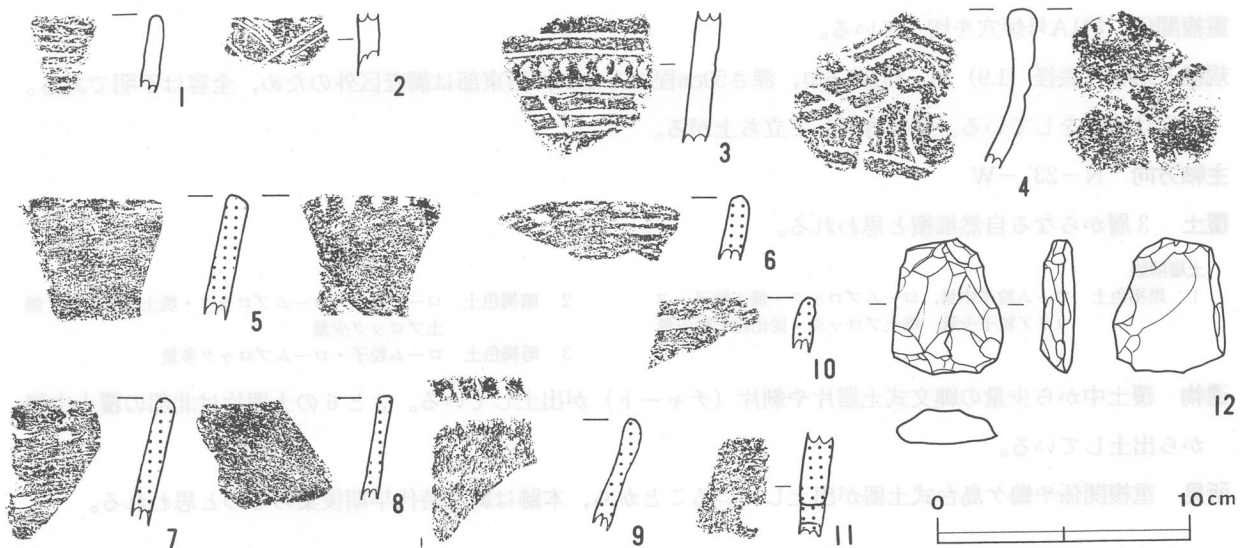
遺物 覆土内から少量の縄文式土器片(早期)やスクレイパー(砂岩製)、剥片(粘板岩・チャート)、破礫が出土している。

所見 縄文時代の田戸下層式土器片や上層式土器片、茅山式土器片が出土していることから、本跡は縄文時代早期後葉のものと思われる。

1と2は縄文時代早期中葉の三戸式土器片で、沈線が施されている。3は早期中葉の田戸下層式土器片で横走る沈線と爪形文が施されている。4は早期中葉の田戸上層式土器の口縁部片で、貝殻腹縁文が施されている。5~11は早期後葉の茅山下層式土器片である。



第15図 第1号陥し穴実測図



第16図 第1号陥し穴出土遺物実測・拓影図

第1号陥し穴出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第16図 12	打製石斧	5.4	4.5	1.3	40.3	安山岩	覆土	Q11

6 炉穴

第1A号炉穴 (第17図)

位置 調査区の中央部, B1a₉区。

重複関係 第1B号炉穴に切られている。

規模と形状 長径 (2.4) m, 短径 (0.6) m, 深さ40cm程であるが, 南東部は調査区外のため, 全容は不明である。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

主軸方向 N-85°-E

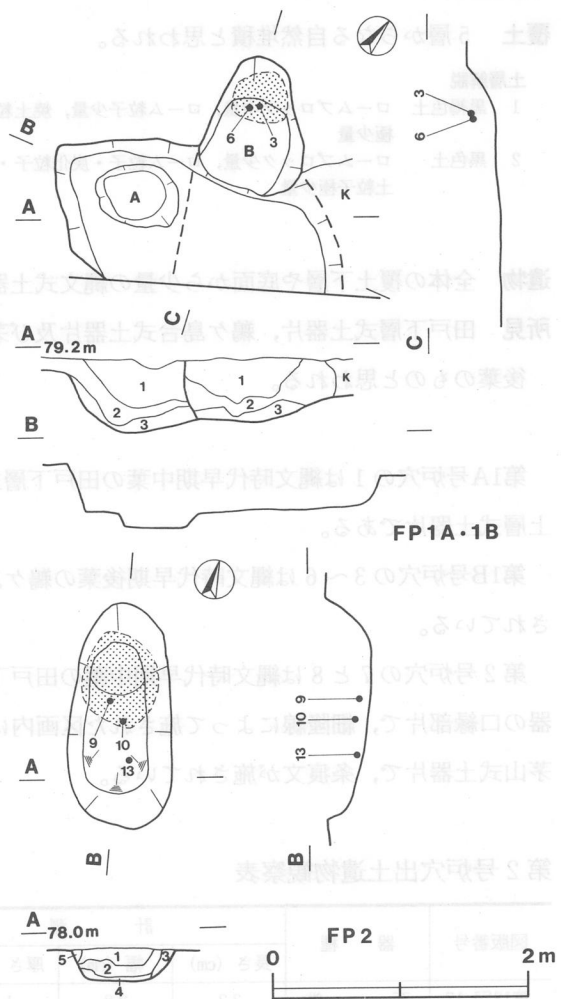
覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色土 ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・焼土ブロック・スコリア粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量, ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子・焼土ブロック中量, スコリア粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

遺物 覆土中から極少量の縄文式土器片が出土している。

所見 田戸下層式土器片と上層式土器片が出土していることから, 本跡は縄文時代早期中葉のものと思われる。



第1B号炉穴 (第17図)

位置 調査区の中央部, B1a₉区。

第17図 第1A・1B・2号炉穴実測図

重複関係 第1A号炉穴を切っている。

規模と形状 長径(1.9)m, 短径1.6m, 深さ50cm程であるが, 南東部は調査区外のため, 全容は不明である。

底面は皿状をしている。壁は外傾して立ち上がる。

主軸方向 N-23°-W

覆土 3層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|--|--------|------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・ス
コリア粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子極少量 | 2 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子中量, 焼
土ブロック少量 |
| | | 3 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量 |

遺物 覆土中から少量の縄文式土器片や剥片(チャート)が出土している。3と6の土器片は北部の覆土中層から出土している。

所見 重複関係や鶺鴒ヶ島台式土器が出土していることから, 本跡は縄文時代早期後葉のものと思われる。

第2号炉穴(第17図)

位置 調査区の南東寄り, B2a₁区。

規模と形状 長径1.8m, 短径0.8mの長楕円形で, 深さ33cmである。底面は皿状をしている。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

主軸方向 N-16°-W

覆土 5層からなる自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック中量, ローム粒子少量, 焼土粒子
極少量 | 3 黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量, ロームブロック極少
量 |
| 2 黒色土 | ロームブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・焼
土粒子極少量 | 4 黒褐色土 | ロームブロック多量, ローム粒子・焼土粒子極少
量 |
| | | 5 暗褐色土 | 焼土粒子多量, ローム粒子少量 |

遺物 全体の覆土下層や底面から少量の縄文式土器片や焼破礫(砂岩), 剥片(チャート)が出土している。

所見 田戸下層式土器片, 鶺鴒ヶ島台式土器片及び茅山式土器片が出土していることから, 本跡は縄文時代早期後葉のものと思われる。

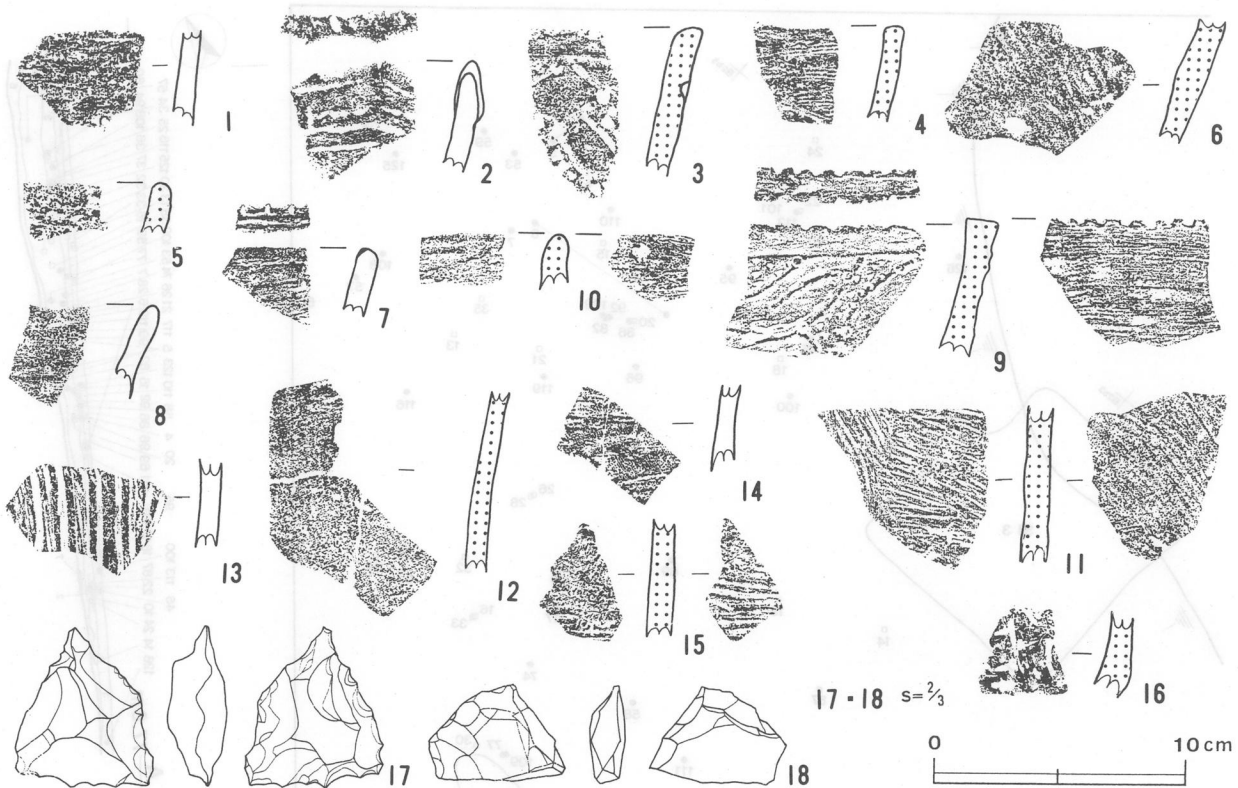
第1A号炉穴の1は縄文時代早期中葉の田戸下層式土器片で, 2は刺突文が施されており, 早期中葉の田戸上層式土器片である。

第1B号炉穴の3~6は縄文時代早期後葉の鶺鴒ヶ島台式土器片で, 3の口縁部片は沈線区画内に刺突文が施されている。

第2号炉穴の7と8は縄文時代早期中葉の田戸下層式土器の口縁部片である。9は早期後葉の鶺鴒ヶ島台式土器の口縁部片で, 細隆線によって施された区画内に竹管による刺突文が付加されている。10~16は早期後葉の茅山式土器片で, 条痕文が施されている。

第2号炉穴出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第18図 17	石 鏃	3.2	2.8	1.2	8.2	チャート		Q9, 未製品
18	石 鏃	2.0	2.8	0.7	3.1	チャート	1区 覆土	Q10, 未製品



第18図 第1A・1B・2号炉穴出土遺物実測・拓影図

7 遺構外出土遺物

ここでは、遺物包含層及び遺構外から出土した遺物について記載する。

遺物包含層 (第19図)

位置 調査区の南東部, B2b, 区付近。

状態 北西から調査区外の南東方向に向かって, 谷津が形成されている。

覆土 傾斜地に向かって, 自然に流れ込んだと思われる黒色土や褐色土の堆積が確認された。

土層解説

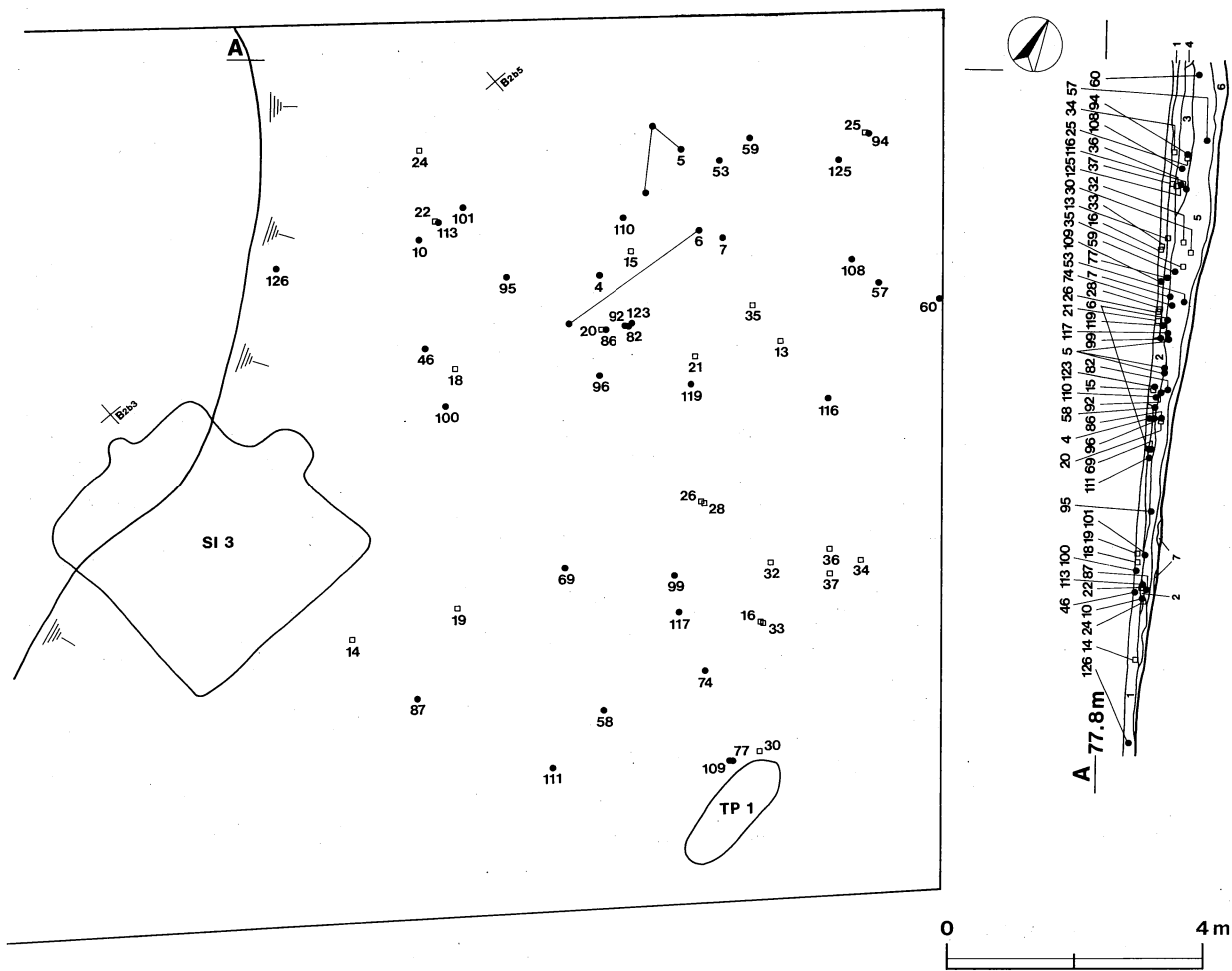
1 暗褐色土(耕作土)	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子極少量	4 褐色土	ローム粒子少量, 炭化粒子・焼土粒子極少量
2 にぶい黄褐色土	炭化物少量, 焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック極少量	5 黒色土	焼土粒子・焼土ブロック極少量
3 暗褐色土	ローム粒子少量, 炭化粒子・炭化物・焼土粒子極少量	6 黒色土	焼土粒子少量
		7 褐色土(ローム漸移層)	ローム粒子多量, 炭化粒子極少量

遺物 土層5・6を中心に縄文時代早・前期の土器1997片と石皿, 凹石, 磨石, 敲石, 石鏃, 礫片(砂岩, 安山岩, 石英閃緑岩)及び剥片(チャート, 石英, 安山岩, メノウ)が出土している。

所見 ほとんどの縄文式土器片は接合関係がなく, 摩滅も激しいことから自然流入したものと思われる。また, 包含層の中に第3号住居跡が作られていることから, 9世紀代にはこの谷津は完全に埋まっていたものと思われる。

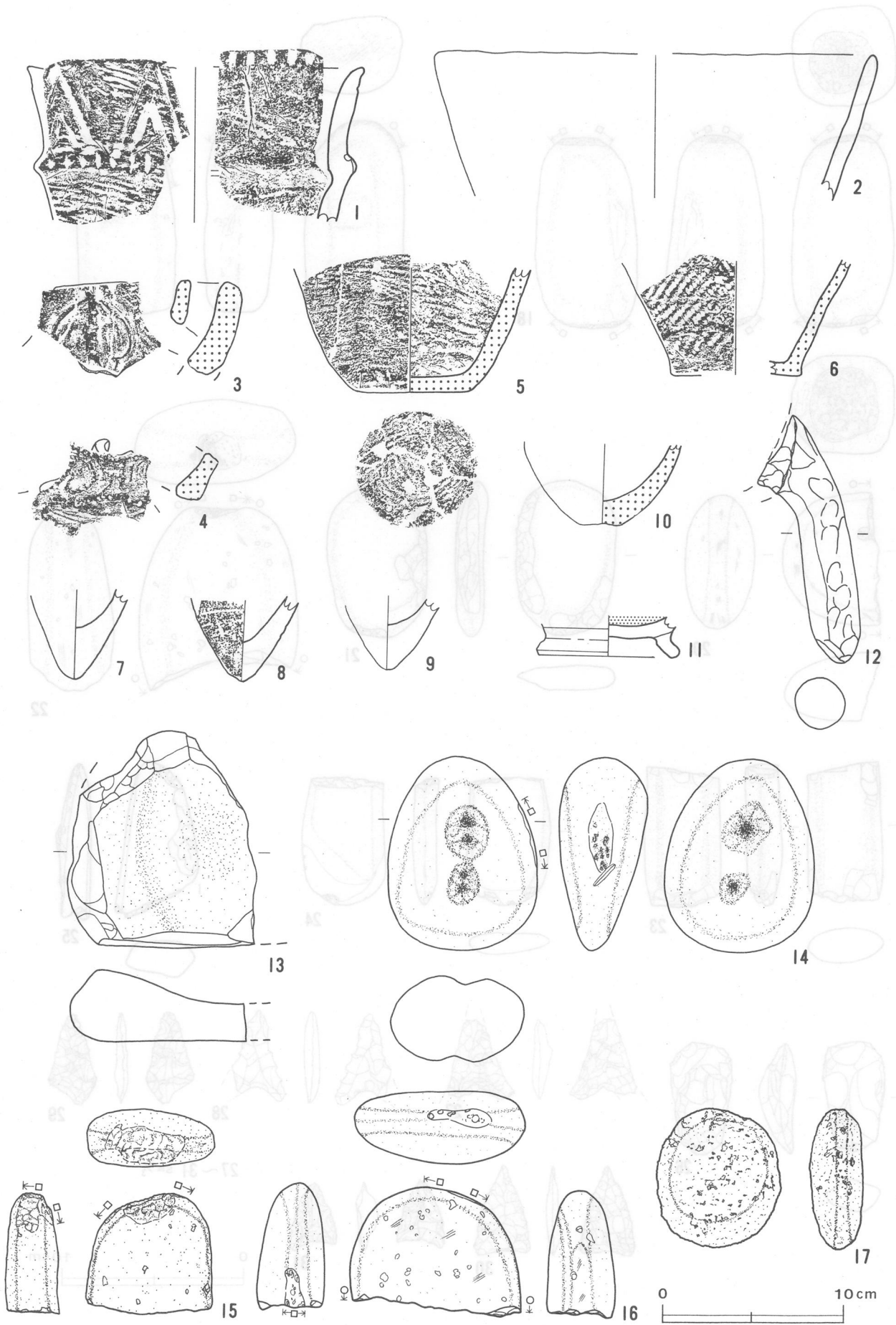
遺物包含層出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	深鉢 縄文式土器	A [18.6] B (8.5)	胴部・口縁部片。胴部と口縁部の境に段を持ち, 口縁部はわずかに外反する。胴部と口縁部には条痕文が施され, 段の部分は棒状工具による刻みが入られている。口縁部には棒状工具による山形文が, 口唇部は棒状工具の押圧で波状を呈している。	スコリア, 石英, 雲母 にぶい褐色 普通	P22, 5% 大畑G式土器



第19図 遺物包含層実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第20図 2	深鉢 縄文式土器	A [24.4] B (8.0)	口縁部片。口縁部は直線的に立ち上がる。	スコリア, 長石, 雲母 にぶい褐色 普通	P23, 5% 田戸上層式土器
3	深鉢 縄文式土器		管状把手片。外面には、微隆起線による渦巻文が描かれている。	雲母, 石英, 長石, 繊維 にぶい褐色 普通	P24, 2% 茅山下層式土器
4	深鉢 縄文式土器		管状把手片。外面には、微隆起線による渦巻文が描かれている。	石英, 長石, 白色物, 繊維 明赤褐色 普通	P25, 2% 茅山下層式土器
5	深鉢 縄文式土器	B (6.2) C 6.6	底部・胴部片。平底。胴部はわずかに内彎しながら外傾する。胴部内・外面に条痕文が施されている。	雲母, 石英, 長石, 繊維 にぶい黄褐色 普通	P26, 20% 茅山下層式土器 二次火熱痕
6	深鉢 縄文式土器	B (6.2) C [7.2]	底部・胴部片。平底。胴部は直線的に外傾する。胴部外面には単節縄文が施されている。	石英, 長石, 繊維 明褐色 普通	P27, 10% 関山式土器 二次火熱痕
7	尖底深鉢 縄文式土器	B (4.5)	底部片。	石英, 小石 にぶい橙色 普通	P28, 5% 三戸式土器
8	尖底深鉢 縄文式土器	B (4.5)	底部片。外面には、斜方向の沈線が施されている。	石英, 長石, 雲母, スコリア 橙色 普通	P29, 5% 三戸式土器



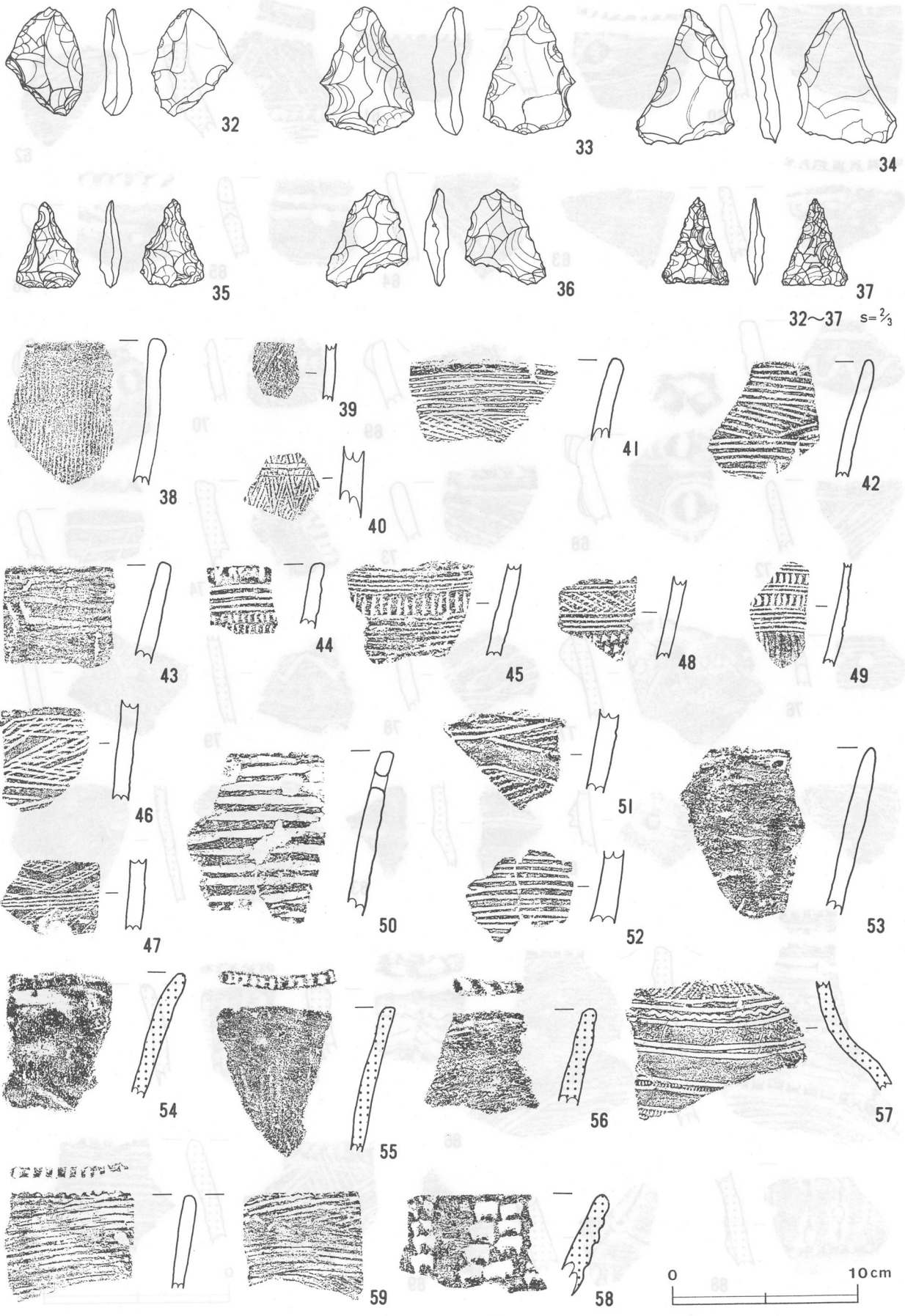
第20图 遺物包含層出土遺物実測図(1)

(S) 図 既 実 測 土 出 層 含 包 遺 物 測 図 IS 表

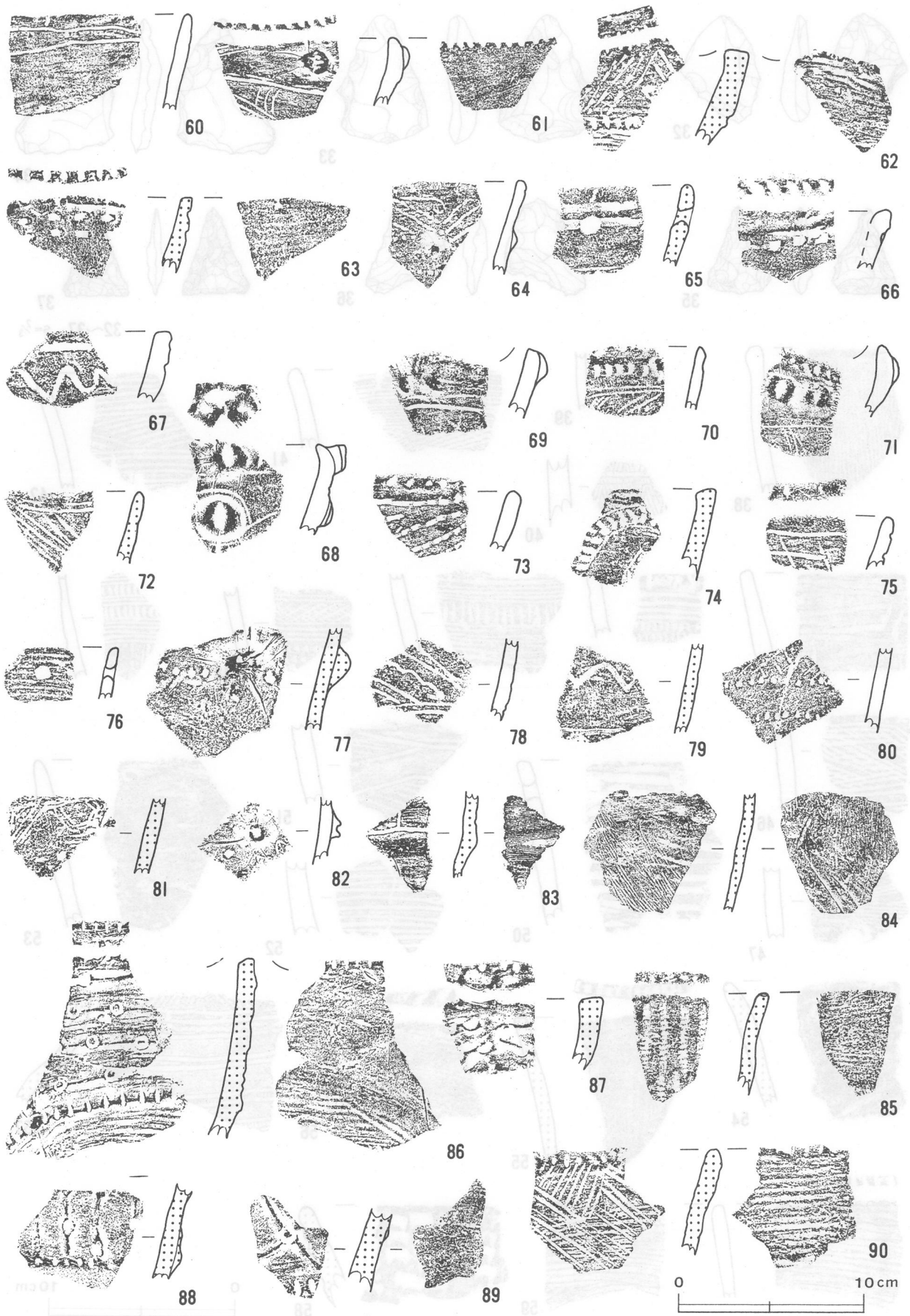


第21图 遺物包含層出土遺物実測図(2)

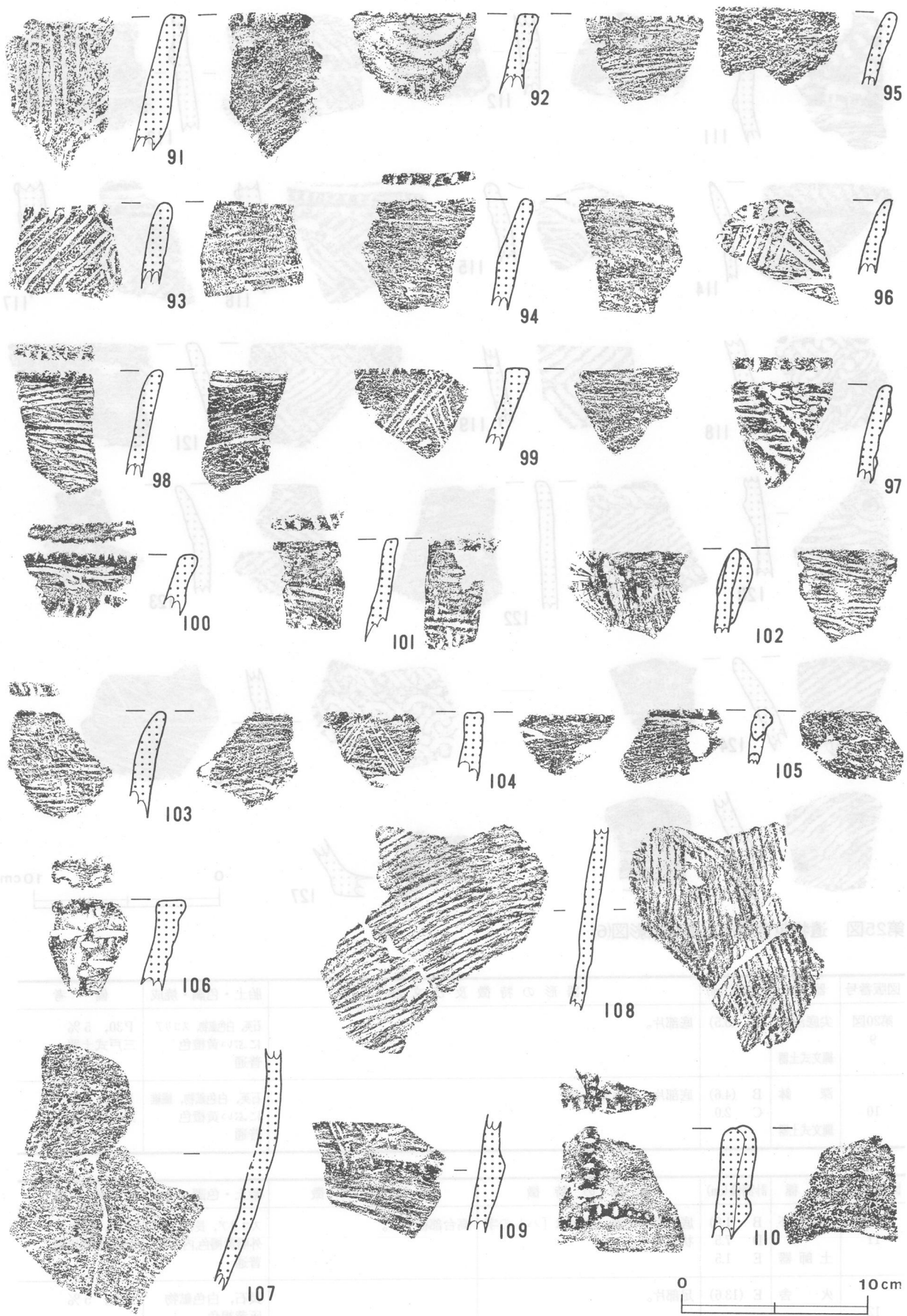
山形県寒川町出土の縄文時代前期の遺物実測図(2)



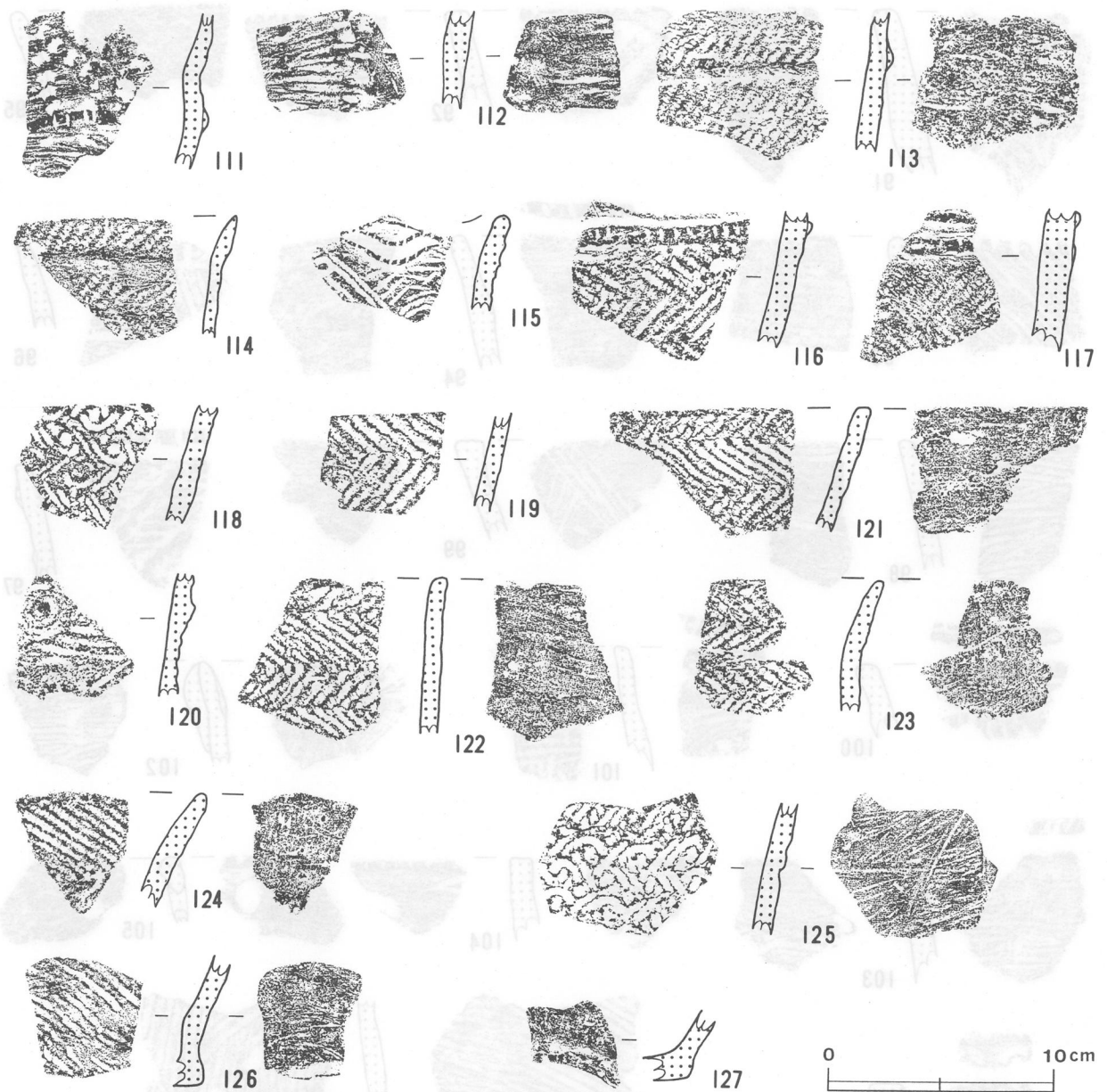
第22図 遺物包含層出土遺物実測・拓影図(3)



第23图 遺物包含層出土遺物拓影图(4)



第24图 遺物包含層出土遺物拓影图(5)



第25図 遺物包含層出土遺物拓影図(6)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第20図 9	尖底深鉢 縄文式土器	B (3.5)	底部片。	石英, 白色鉱物, スコリア にぶい黄橙色 普通	P30, 5% 三戸式土器
10	深鉢 縄文式土器	B (4.6) C 2.0	底部片。小さな丸底。	石英, 白色鉱物, 繊維 にぶい黄橙色 普通	P31, 5% 黒浜式土器

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 11	高台付杯 土師器	B (1.8) D 7.5 E 1.5	底部片。平底。高台は「ハ」の字 状に開く。	高台部横ナデ。	スコリア, 長石, 雲母 外明黄褐色, 内黒色 普通	P32, 30% 内面黒色処理
12	火舎 土師器	E (13.6)	足部片。		長石, 白色鉱物 灰黄褐色 普通	P33, 5%

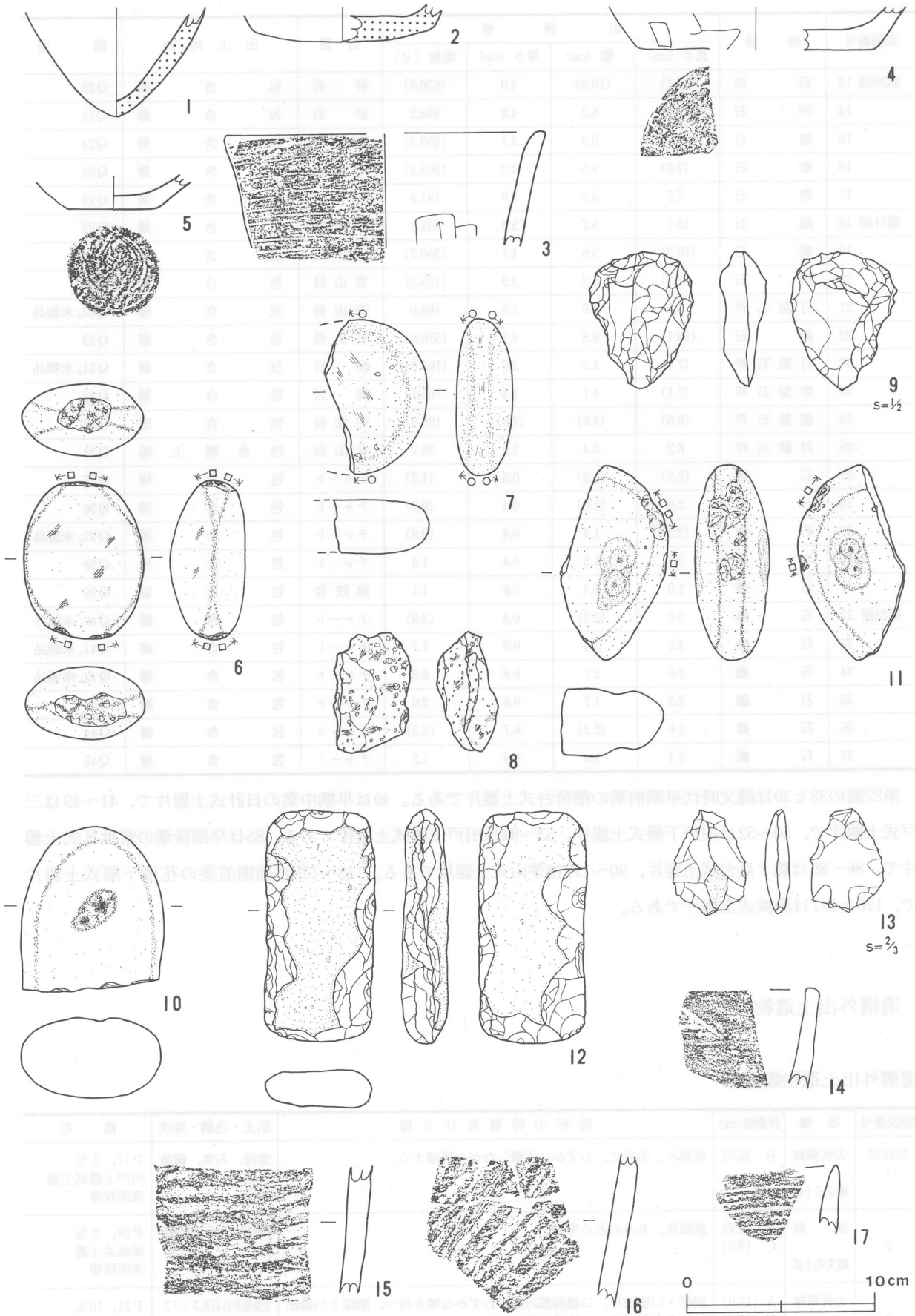
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第20図 13	石皿	(12.1)	(10.3)	4.0	(636.6)	砂岩	包含層	Q20
14	凹石	10.6	8.2	4.8	494.2	砂岩	包含層	Q21
15	敲石	(6.6)	6.9	3.1	(203.2)	安山岩	包含層	Q24
16	磨石	(7.0)	9.5	4.0	(365.8)	安山岩	包含層	Q25
17	磨石	7.7	6.7	3.0	141.8	安山岩	包含層	Q29
第21図 18	敲石	10.7	5.7	5.4	491.1	砂岩	包含層	Q22
19	磨石	(10.3)	5.6	4.1	(350.7)	安山岩	包含層	Q27
20	磨石	(7.3)	5.3	3.9	(195.3)	安山岩	包含層	Q26
21	打製石斧	5.5	8.6	1.5	108.9	安山岩	包含層	Q30, 未製品
22	敲石	(10.1)	8.8	4.7	(570.0)	安山岩	包含層	Q23
23	打製石斧	(7.8)	4.3	2.0	(108.0)	泥岩	包含層	Q31, 未製品
24	磨製石斧	(7.1)	4.7	1.4	(66.7)	泥岩	包含層	Q32
25	磨製石斧	(8.6)	(4.6)	(2.0)	(99.3)	蛇紋岩	包含層	Q33
26	打製石斧	6.2	3.4	2.0	38.7	安山岩	包含層上層	Q34
27	石鏃	(2.2)	(1.9)	0.5	(1.2)	チャート	包含層	Q35
28	石鏃	2.6	(1.6)	0.4	(0.9)	チャート	包含層	Q36
29	石鏃	(2.5)	1.4	0.4	(0.9)	チャート	包含層	Q37, 未製品
30	石鏃	2.5	1.5	0.4	1.4	チャート	包含層	Q38
31	石鏃	1.9	1.4	0.6	1.1	流紋岩	包含層	Q39
第22図 32	石鏃	3.0	(2.2)	0.8	(3.9)	チャート	包含層	Q40, 未製品
33	石鏃	3.5	2.6	0.9	7.7	チャート	包含層	Q41, 未製品
34	石鏃	3.6	2.7	0.8	6.8	チャート	包含層	Q42, 未製品
35	石鏃	2.3	1.7	0.6	2.0	チャート	包含層	Q43
36	石鏃	2.6	(2.2)	0.7	(3.3)	チャート	包含層	Q44
37	石鏃	2.4	1.8	0.5	1.2	チャート	包含層	Q45

第22図の38と39は縄文時代早期前葉の稲荷台式土器片である。40は早期中葉の日計式土器片で、41～49は三戸式土器片で、50～52は田戸下層式土器片、53～84は田戸上層式土器片である。85は早期後葉の常世II式土器片で、86～89は鵜ヶ島台式土器片、90～112は茅山式土器片である。113～125は前期前葉の花積下層式土器片で、126と127は黒浜式土器片である。

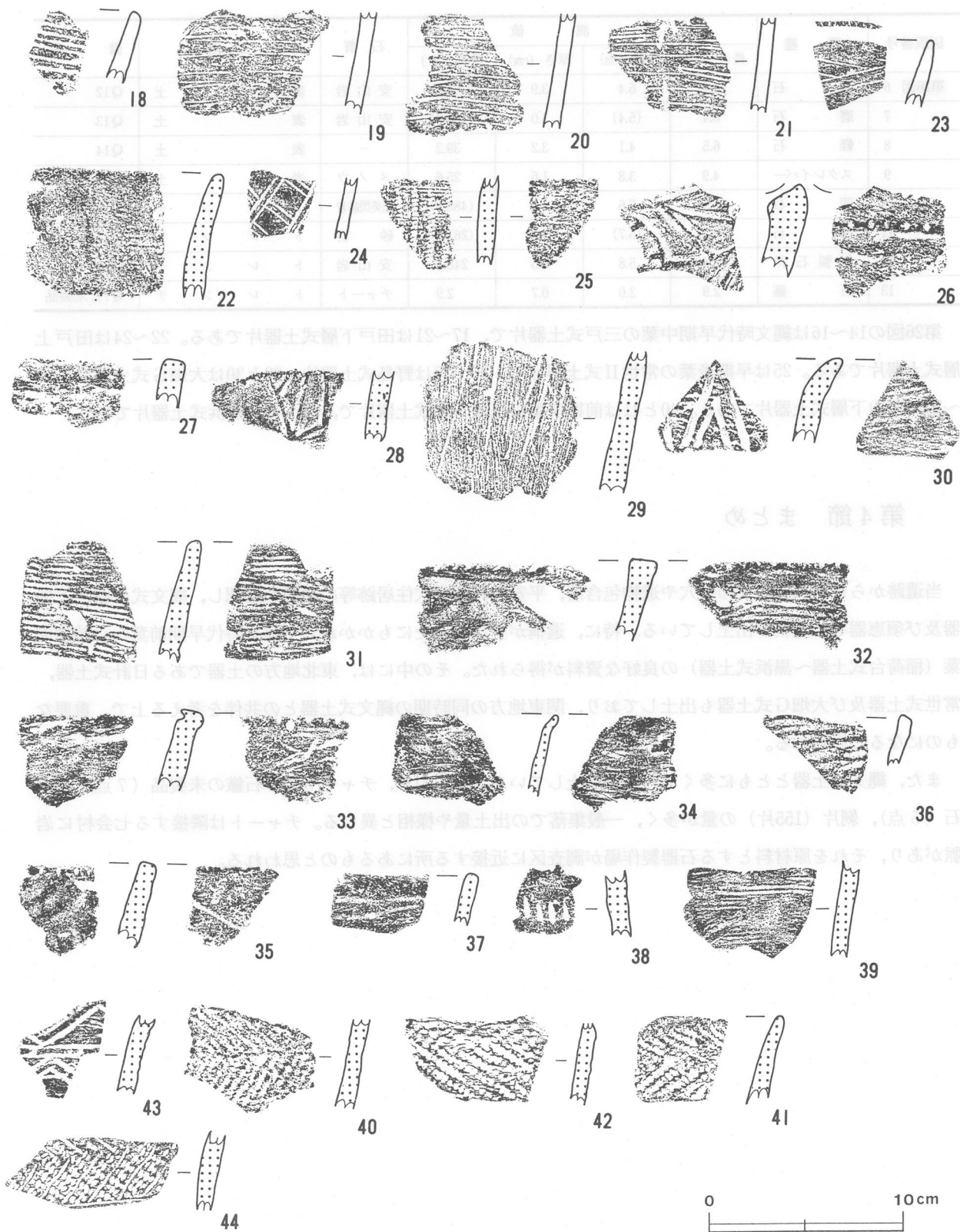
遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	尖底深鉢 縄文式土器	B (5.9)	底部片。尖底で、わずかに内彎しながら外傾する。	雲母、石英、繊維 橙色 普通	P17, 5% 田戸上層式土器 表面採集
2	深鉢 縄文式土器	B (1.7) C [9.2]	底部片。丸みのある平底。	石英、針状鉱物、白色鉱物、繊維 橙色 普通	P18, 3% 黒浜式土器 表面採集
3	尖底深鉢 縄文式土器	A [17.0] B (6.2)	胴部・口縁部片。口縁端部内面にわずかな稜を持つ。胴部と口縁部は、多条の横走る沈線が施されている。	金雲母、長石、石英、スコリア にぶい褐色 普通	P21, 10% 田戸下層式土器 表土



第26図 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第27図 遺構外出土遺物拓影図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 4	甕 土師器	B (2.3) C [12.6]	底部・体部片。平底。	体部外面下位横方向のヘラ削り。	石英, スコリア, 白色鉱物 橙色 普通	P19, 5% 表土
5	坏 土師質土器	B (1.5) C 4.6	底部・体部片。平底。体部は直線的に外傾する。	体部横ナデ。底部回転糸切り。	雲母, スコリア, 針状鉱物 橙色 普通	P20, 5% 表土

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第26図 6	敲石	8.5	6.4	3.9	305.2	安山岩	表土	Q12
7	磨石	8.4	(5.4)	3.0	(187.5)	安山岩	表土	Q13
8	軽石	6.5	4.1	3.2	39.2	—	表土	Q14
9	スクレイパー	4.9	3.8	1.6	25.6	メノウ	表土	Q15
10	凹石	(8.9)	7.6	4.3	(480.9)	石英閃緑岩	トレンチ	Q16
11	凹石	(10.3)	(5.7)	3.9	(261.3)	砂岩	トレンチ	Q17
12	打製石斧	12.4	5.8	2.5	248.1	安山岩	トレンチ	Q18
13	石鏃	2.9	2.0	0.7	2.9	チャート	トレンチ	Q19, 未製品

第26図の14～16は縄文時代早期中葉の三戸式土器片で、17～21は田戸下層式土器片である。22～24は田戸上層式土器片である。25は早期後葉の常世Ⅱ式土器片で、26～28は野島式土器片、29と30は大畑G式土器片、31～39は茅山下層式土器片である。40と41は前期前葉の花積下層式土器片で、42～44は黒浜式土器片である。

第4節 まとめ

当遺跡からは、縄文時代の炉穴や遺物包含層、平安時代の竪穴住居跡等の遺構を確認し、縄文式土器、土師器及び須恵器等の遺物が出土している。特に、遺構が少なかったにもかかわらず縄文時代早期前葉から前期前葉（稻荷台式土器～黒浜式土器）の良好な資料が得られた。その中には、東北地方の土器である日計式土器、常世式土器及び大畑G式土器も出土しており、関東地方の同時期の縄文式土器との共伴を考える上で、重要なものになると思われる。

また、縄文式土器とともに多くの石器も出土している。その中で、チャート製の石鏃の未製品（7点）や敲石（5点）、剥片（155片）の量が多く、一般集落での出土量や様相と異なる。チャートは隣接する七会村に岩脈があり、それを原材料とする石器製作場が調査区に近接する所にあるものと思われる。

写 真 图 版



遺跡遠景



遺跡全景

PL 2



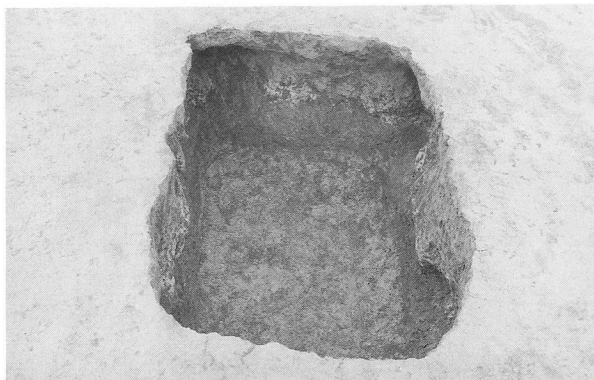
第 1 号住居跡



第 2 号住居跡



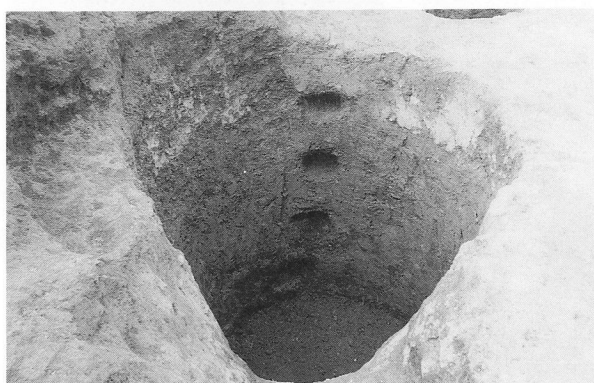
第 3 号住居跡



第 2 号土抗



第 6 号土抗



第 1 号井戸



第 2 号井戸



第 2 号炉穴



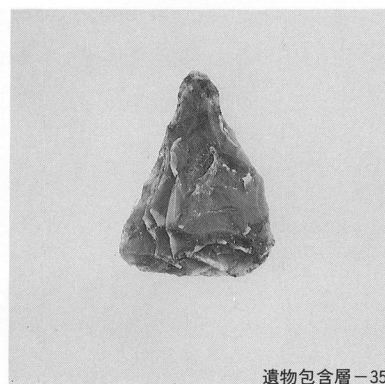
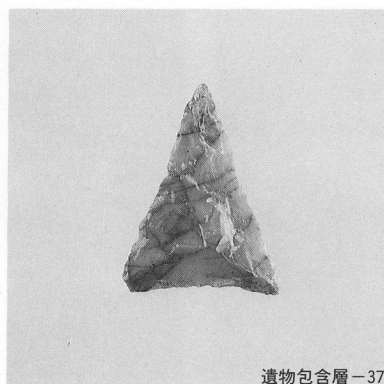
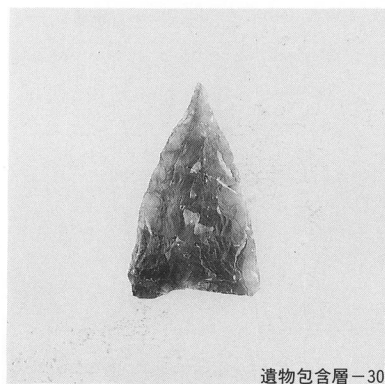
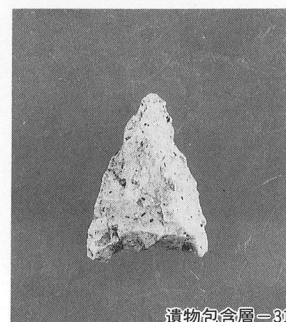
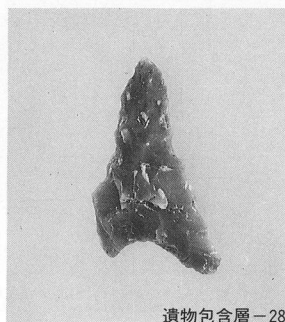
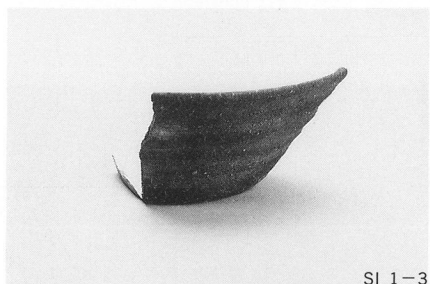
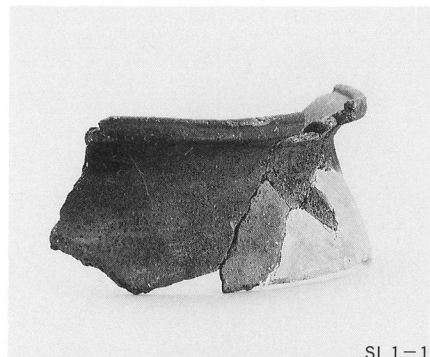
第 2 号炉穴遺物出土状況



第 1・2 号柵列



第 1 号陷し穴



第1・2号住居跡出土遺物、遺構外出土遺物

6-6 6-7 6-8

6-9 8-9 8-10 8-11 8-12

8-13 10-8 10-9 10-10

10-11 10-12 10-13 10-14



16-1 16-2 16-3 16-4

16-5 16-6 16-7 16-8

16-9 16-10 16-11 18-1

18-3 18-4 18-2 18-5 18-6



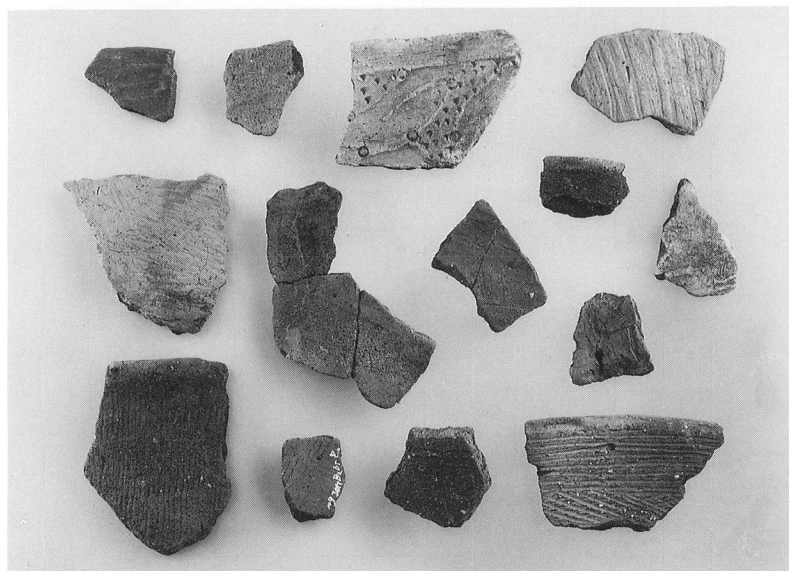
18-7 18-8 18-9 18-13

18-10

18-11 18-12 18-14 18-15

18-16

22-38 22-39 22-40 22-41



出土土器(1)〔版下番号一図版番号〕

PL 6



22-42 22-43 22-44 22-45

22-46 22-47 22-49 22-48

22-50 22-51 22-52 22-53

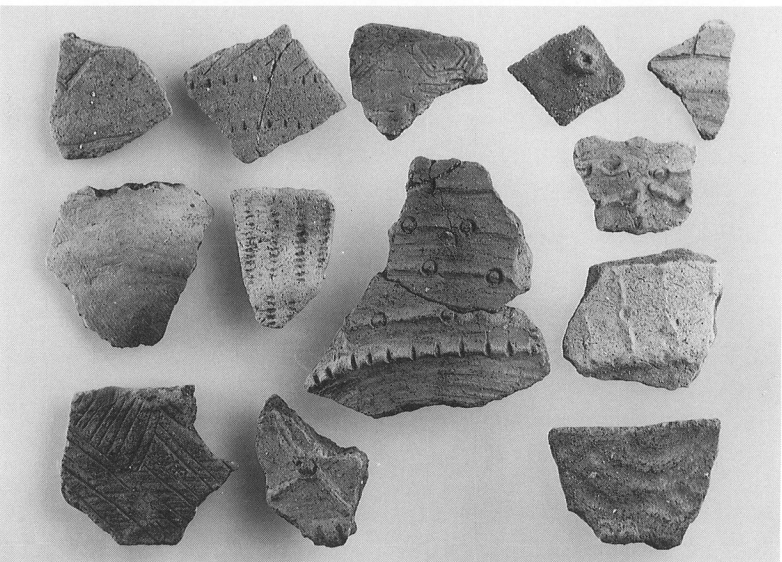


23-63 23-64 23-65 23-66

23-67 23-68 23-69 23-70

23-71 23-72 23-73 23-74

23-75 23-76 23-77 23-78



23-79 23-80 23-81 23-82 23-83

23-84 23-85 23-86 23-87

23-88

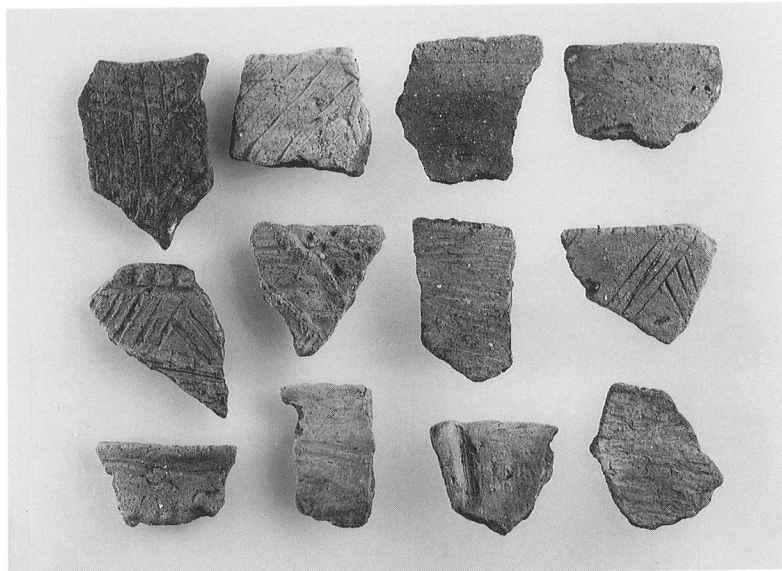
23-90 23-89 23-92

出土土器(2)

24-91 24-93 24-94 24-95

24-96 24-97 24-98 24-99

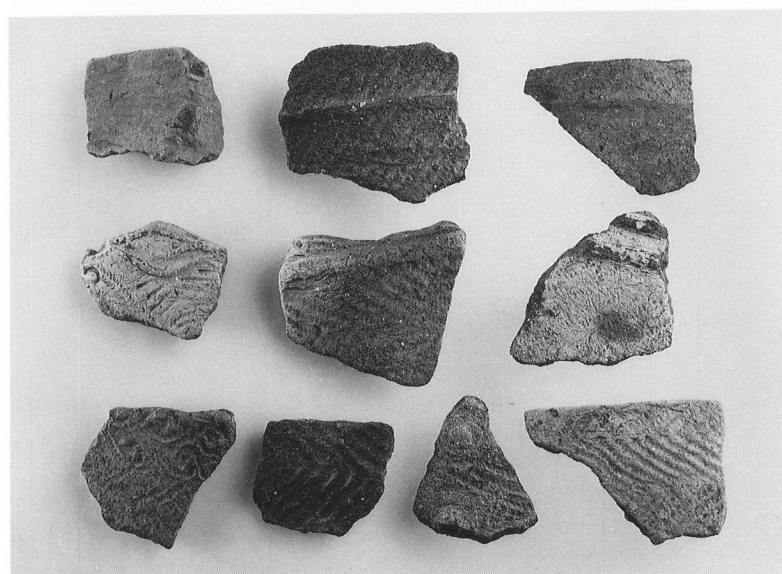
24-100 24-101 24-102 24-103



25-112 25-113 25-114

25-115 25-116 25-117

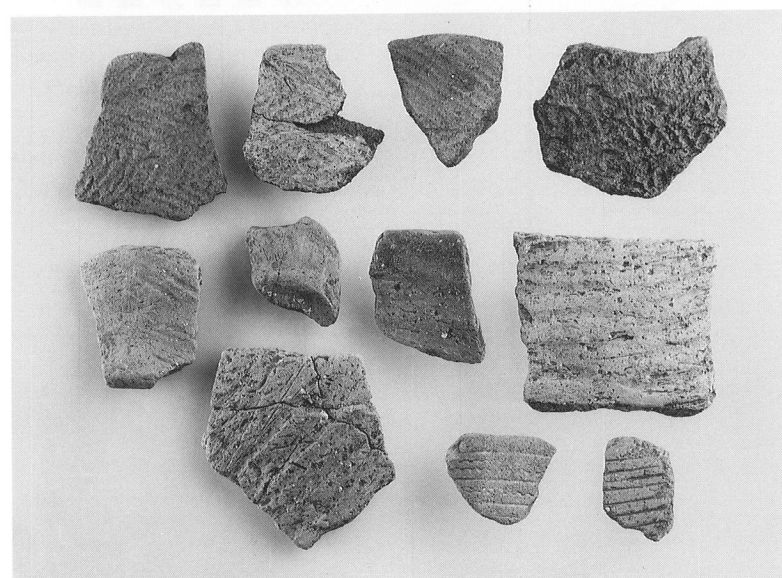
25-118 25-119 25-120 25-121



25-122 25-123 25-124 25-125

25-126 25-127 26-14 26-15

26-16 26-17 26-18



茨城県教育財団文化財調査報告第104集
常北町道105号線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

小坂宮方遺跡

平成7（1995）年9月25日印刷
平成7（1995）年9月30日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
印刷 株式会社 三栄印刷
〒311-41 水戸市谷津町1-50
TEL 029-252-6501